

フィラスティン

PLO Magazine: Filastin Biladi

びらーで

臨時
増刊



中東・パレスチナ問題の情報誌

No.23 Oct. 1981

アラファト議長来日記念臨時増刊号



اهلا وسهلا ابو عمار

〈グラビア特集〉

アラファト議長の横顔 ثورة حتى النصر

待ちに待ったアラファト議長が来日する。世界で最も多忙と言われる議長の横顔と活動をグラビアで特集した。アラビア語はPLOのスローガン、「サウラ・ハッタ・ナスル(勝利の日まで革命を)」である。



パレスチナよ 永遠なれ

ファドワ・トウカーン

偉大なる

偉大なる祖国よ

石臼は幾度となく

苦しみの暗夜に反転するだろう

だが それらの幾夜も

おんみの放つ光を消し去るものではない

踏みつぶされた希望によって

十字架を負った おんみの成長によって

盗まれたおんみの微笑によって

おんみの息子と娘たちは ほほえむ

廃墟と拷問から

血ぬられた壁から

そして 生と死の戦慄から

生命が産み出される

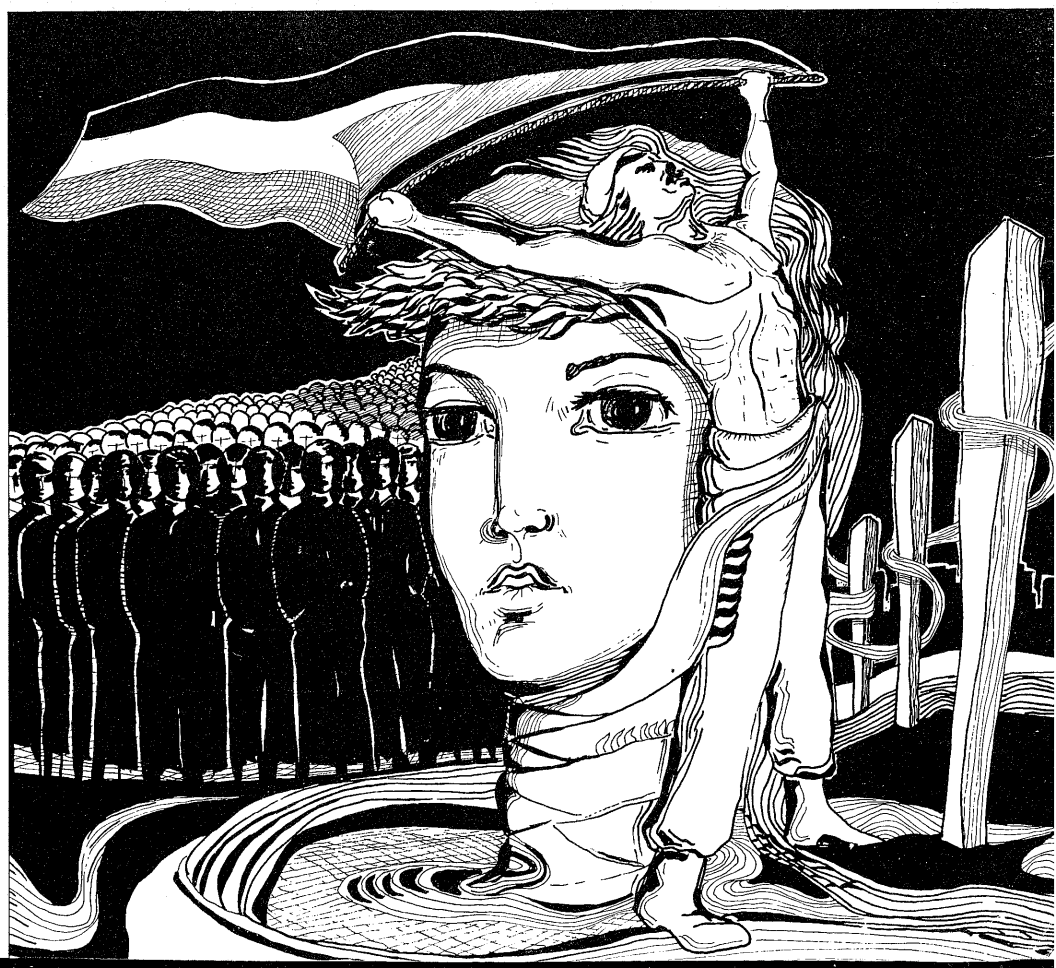
ああ 偉大なる祖国の大地よ

おんみが負っている 深い傷よ

そして ただ一つの愛よ

(一九六七年九月ナブルスにて)

(訳 関場理二)



詩人について

ファドワ・トウカーン 一九四七年、パレスチナのナブルスに生まれた女流詩人。三六歳の若さ

で死んだ兄イブラヒムも著名な詩人。彼女は、すぐれた恋愛抒情詩人として、また、失われた祖国

をうたう抵抗詩人として、評価は内外ともに高い。かつて、イスラエルのダヤンをして「彼女の

編の詩は十個師団に相当する」といわしめたほどだが、パレスチナにおける詩の役割を敵ゆえに見

事に表現している。





今は亡きユーゴのチトー大統領と。



ワルトハイム国連事務総長は何度もベイルートで会談をもった。



インドのガンディー首相との会談はPLO承認の新たな流れをつくった。



執務室で日本のテレビと単独会見、日本人のスピリットを力説……。



日本パレスチナ友好議員連盟の木村俊夫会長との会見は議長訪日の基礎となった。



レバノンのイスラム教徒連帯集会で……。



ルーマニアのチャウシェスク大統領と。



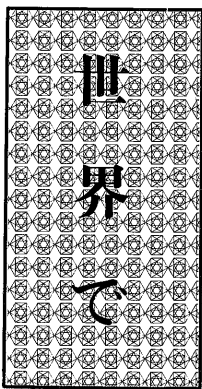
各国訪問のあい間にスポーツ祭典の点火式に臨む。



Palestine
فلسطين
لن ننسك



アラブアト議長は語る



自決権の行使を決めるのは、パレスチナ解放の戦士たちであり、イスラエル占領下で決起している学生たちであり勇敢な市長たちである。

パレスチナ人民が自決権をいつ、いかなる状況のもとで行使するか——それを決めるのは、ベネチア・サミットでもベントゴンでもなく、闘うパレスチナ人民である。われわれが長い間、困難な人民戦争を進めてきたのは、ユダヤ人と闘うためではなく、ユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラム教徒も、共に平和と平等のもとに共存できる民主主義国家をパレスチナに樹立するためである。

——パレスチナ作家・ジャーナリスト総連合



1981年7月、イスラエルはベイルート市を含むレバノンを無差別爆撃し、死傷者は2567人に達した。



主催「中東におけるアメリカの軍事的脅威に関する会議」での演説（一九八〇年六月十三日・ベイルート）

（パレスチナ国家は、どのようなものになるか、との問いに対して）

ある人たちは、パレスチナが共産国家になるだろうとか、イスラムの狂信主義的な国家になるだろうという。またある人たちは、非宗教的な国家になるだろうともいう。こうした予測をする人たちの中には、われわれの友人もいるし、敵もいる。一つだけ明確にしておくが、パレスチナ国家は「民主主義の緑り豊かなオアシス」になることは確かである。

パレスチナ革命は、アラブ世界で民主主義を実現している最初の革命であるという事実を私は誇りに思っている。この革命にはイスラム教徒も、キリスト教徒も、ユダヤ教徒も参加している。

——「エイト・デイズ」コリン・チャップマン記者とのインタビューで（一九七九年十一月三日）

VOICE OF PALESTINE

「帝国主義とシオニズムは、アラブの天然資源をアラブ人民と開発途上国の諸国民を隷属化するための武器として、これを利用してきている。一方、われわれは、アラブの石油をアラブ人民と全世界の人民が、貧困でも隷属化でもなく、繁栄のための源泉に転化してゆくために闘っている。パレスチナ解放の戦いの勝利が、アラブの石油をコントロールしてゆく戦いと一体となっていることは、かくしだてする必要のない事実である。

今日の中東は、一触即発の弾薬庫である。三〇年以上にわたる戦争と占領にさらされてきたわがパレスチナ人民の間には、帝国主義とシオニズムの度重なる陰謀に対する怒りの波が、澎湃としてまき起っている。もし国際社会がこれに正しく対処することがないとすれば人民の怒りは必ずや爆発するであろう。従って、われわれは、西ヨーロッパの国々が、国際関係における重要な役割を担い中東と決定的な結びつきをもっている故に、すみやかに率先した行動を

おこし、他の諸国グループと同様に国際的な責任を果たすべきものと確信する。」

「アラブ・パレスチナ人民連帯世界会議」の開会総会における演説より。

(一九七九年一月三日
リスボンにて)

「パレスチナ人民連帯国際デー」の設定などを通じて中東における真の平和の達成のために国連のワルトハイム事務総長が率先して努力を払ってこられたことに感謝したい。

パレスチナ人民のたたかひのめざましいのは中東における真の恒久平和の実現であります。国連総会の三二六決議は、そうした真の平和を確立するための強固な基礎を築きましたが、歴代のイスラエル政府はパレスチナ人民の存在を消し去ろうとやっきになってきたのです。

レバノン南部のパレスチナ・キャンプとレバノンの町や村に加えられたイスラエルの破壊、これによって

六〇万のパレスチナ人たちとレバノン人たちが新たな「難民」となった状況をまとめた国連暫定軍の報告を検討されたことは、きわめて当然のことです。

パレスチナ問題が中東平和の鍵であることは言うまでもありません。アメリカは、中東情勢に内在している惨劇的な危険をつくり出した一切の責任を負うべきです。キャンプ・デービッド合意とエジプト・イスラエル協定は、中東におけるアメリカの野望と彼らの新たな軍事戦略の本質を鮮明に暴露しています。

われわれパレスチナ人民は戦いが好きだから闘っているのではなく、わが祖国においてわれわれの正当な政治目標を達成するためにたたかっているのです。この目標の達成を基盤としてのみ、パレスチナにおける真の平和は達成されるのです。

「国連パレスチナ人民連帯国際デー」にあたり国連に送ったメッセージより。(一九七九年一月二八日)

「パレスチナの婦人たちは、解放の闘いで男性と同等の担い手である。彼女たちは占領下のパレスチナで、あるいはイスラエルの獄舎で不屈に闘い、革命のために銃をとり、革命の旗を高く掲げている戦士である。

「われわれの強固な団結こそ、帝国主義とシオニストの陰謀を打ち砕く盾である。なぜなら、団結は、民主主義の樹立へ向かうわがパレスチナ革命を前進させるからである。その道が厳しく長いものであるゆえに、われわれは団結を守ってゆかなければならない。われわれの歩みは、勝利の日まで闘いを押し進める不屈の決意で、アラブ民族の新しい歴史をつくりあげるであろう。」

—パレスチナ婦人総連帯第三回大会でのあいさつ(一九八〇年一月二十五日)

オマーンとソマリアのアラブの二カ国がアメリカに基地を提供することを申し出たことは、きわめて残念なことである。更にケニアもモンバサの基地を提供した。サダトがエジプトの基地をアメリカに提供していることについては、繰り返して言う必要はない。いずれにしろ、エジプトにおける暗い時代がそう長く続くことはないであろう。アブデル・ナセルとオラビの人民は、必ずや決起するにちがいないからである。

—パレスチナ作家・ジャーナリスト総連帯第三回大会での演説より(一九八〇年五月十日・ベイルート)

(パレスチナ独立国家がつくられたなら、イスラエルはいかにしてその安全が保障されるのか、という質問に対して)

これは、馬鹿げた質問だ。それはイスラエルが、お経の文句のように繰り返しているスローガンだ。イスラエルは、国連加盟国のなかで国境を定めていない唯一の国だ。

完全な国境・防衛可能な国境・軍事的国境・聖書にもとづく国境、そして今日、新たな国境がある。今日のようなミサイルの時代に、いかなる国家にとっても完全などはないのだ。

(ヨーロッパ諸国に対して向けられた今日までの外交戦略が、アメリカの政策を凌駕するまでに至っていないが、この質問に対して)

われわれが、アラブ人だということを忘れないでほしい。われわれは、ラクダの忍耐をもっている。

「私の忍耐心がいついてこれなくなるまでじっと忍耐する」というアラブの格言があるくらいだ。心配はしていない。

歴史の流れは、われわれとともにある。遅かれ早かれ、われわれは目標を達成するのだ。

—一九八〇年四月「ニュースウィーク」誌のインタビューに答えて。

情報の分野において技術的な手段やメディアを独占している列強は、今日でもなお植民地主義政策をおすすめしている。これらの列強は、世界中の聴視者に、彼らの価値観や見解をおしつけており、貧しい弱小人民があたかもルーツも文明も文化も持ちあわせていないかのように、これら弱小民族の文化や思想を圧殺してきたのである。

—第21回ユネスコ総会での演説(一九八〇年十月二十七日、ベオグラード)

わが人民の強固な団結は、わが人民と

われらの諸権利を守る盾であり、イスラエルの占領下と離散(ディアスポラ)にある同胞の団結によって、あらゆる領域のパレスチナ人民がキャンプ・デービッドの合意と「自治」の陰謀などの疑わしい構想をうち破ってきた。キャンプ・デービッド合意と「自治」の陰謀は、わが人民を新たな隷属状態におとし入れるものであった。わが人民武装勢力と人民諸組織の団結は、来たるべき世代の生活の本質を象徴するものであり、それは誇りと尊厳に満ちた生活であり、わが祖国の地に対する、いかなる形態の保護も支配も受けることのない自由な生活である。



VOICE OF PALESTINE

中東地域の形態を決定づけて行くものは、アメリカの艦隊でも緊急展開部隊（RDF）でもなく、それはパレスチナ解放の銃である。なぜならアメリカの艦隊や緊急部隊の運命は、ベトナムで撃墜された四千機の軍用機のたどった運命と何ら変わらないからである。

アラブの連合勢力に結集する戦士たちにとって、いまは困難で危険な時である。なぜなら、シオニストと帝国主義者たちが、われわれの地域に力をおよぼそうとして全面的な策動を強めており、その重要な作戦として、大攻勢をしかけてきており、われわれがこれと

解決してゆかなければならないからである。解放のために、あなた方が放つ銃弾こそが、勝利への道、パレスチナへの道に至る、確かな道標を示してくれるであろうし、その勝利の時に、一人のパレスチナの少年がパレスチナの四色旗を高く掲げるであろう。われらがパレスチナ旗は、伝統あるアラブ民族の旗でもある。

だが、たたかいは困難で長期にわたる。パレスチナ革命を開始した時に、われわれは長期の人民戦争を覚悟していた。そして今年は十七年めに入った。われわれは、パレスチナ革命をたたきつづそうとする一切の策動をうちくたいてきたのだ。

アラブ民族と全世界の自由を愛する人たちから、われわれが必要なのは、祈りや元気でいてほしいというあいさつではない。われわれとともに、この最前線であつたかろうと、

われわれが欲しているものだ。

——一九八一年三月十八日、ベイルートのコマンド・グループの軍事訓練終了式の演説より
レーガン政権は、PLOを「テロリスト集団」と呼んでいる。もし「テロリズム」というものが解放をすすめることを言うのであれば、「テロリズム」にかかわっていることは、われわれの誇りである。……かつては「テロリスト」のレッテルをはられたロバート・ムガベ氏も、今日ではジンバブエの首相ではないか。

——一九八二年三月二十二日、アデンで開かれた第十三回アジア・アフリカ人民連帯会議での演説より

われわれアラブ民族は、偉大なことをなし得る。イスラエルが直面している最大の危険は自らの力に対する幻想であると言った人がいるが、私もそう考える。しかも、イスラエルの力なるものは、それ自身のものではなく、輸入されたものであるという指摘にも同感だ。だが、われわれアラブの力は、真の力であり、われわれは、アメリカと対決して

——一九八一年五月二十二日、チュニスで開かれた「アラブ連盟緊急会議」での演説より

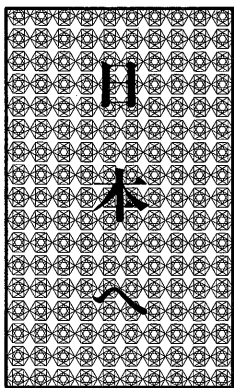
この緊急のよびかけを行なうにあたり、明らかにしておきたいのは、われわれの流している血は水ではないということである。われわれの流しているのは、人民の赤い血であ

り、それは、まさに地の塩なのだ。しかも毎日、新たな犠牲者の血が流され、犠牲者の数は、日ごとに加えられている。イスラエルの五十四機のファントムは、一回の爆撃で六五〇トンの爆弾を、更に十一の地点にロケット砲弾を投下し九十五人もの人たちを殺りくし負傷させた。

この会議では、手もちの一切のカードを、誠意をもって、正直に、何の誇張もなく出し合わねばならない。持っている一切のものを出し合うべきである。なぜなら、歴史は証人として、われわれを見守っているからであり、しかも歴史は、一切を見とおしているからである。

——一九八一年五月二十二日、チュニスで開かれた「アラブ連盟緊急会議」での演説より
いかなるものであれ、われらの合同軍やパレスチナ革命を脅かすことはできない。ベギンが、F15やF16の戦闘機を使って、罪のない民間人を砲撃し、この地域で騒乱を引き起こせるものと考えているとしても、われらの合同軍とパレスチナ革命の行く手を遮ることはできない。……われわれ兵士の士気は、高い。彼らの持つ武器が、敵のものに比べて遙かに性能が劣っていても、戦うのは武器のみではないことを彼らは知っている。……科学技術が、その意志を人々に押しつけることができるなどと、誰に言えようか。

——一九八一年七月十五日、ベイルートでのパレスチナ作家ジャーナリスト総同盟の会議の最終日における演説より。



「パレスチナ革命の銃火は、老若男女を問わず、わがパレスチナ人民に加えられている策謀に対決する闘いであるだけ

でなく、自由を愛し、人間の尊厳の確立をめざす全世界の人びとのためのものでもあります。
わが人民は、祖国パレスチナに帰還し、民族自決と独立国家の樹立という目的が達成される日まで闘い続けることを固く決意しています。」

——在日朝鮮人総連合ハン・ドクス議長へのメッセージより（一九八〇年一月）



「日本パレスチナ友好議員連盟の支持は、パレスチナ人民の闘いにとって大きな激励になっています。

祖国に帰還し、自決権と主権国家を樹立する権利を含む民族的諸権利の実現をめざすパレスチナ人民の闘いを心から支持して下さる日本パレスチナ友好議員連盟の各位に深い感謝の意を表明します。
——日本パレスチナ友好議員連盟への感謝のメッセージより（一九七九年十一月）

おそれ早かれ、われわれはアラブの武器（石油）を使うだろう。アメリカは戦場であらゆる兵器を駆使してきた。この前は、小麦やオリソビックまで武器として使ったではないか。アラブ側が石油を武器として使ったとしても驚くにあたらない。

一つのアクションに対して何らかのリアクションが起こる。これは物理の法則である。継続的に圧迫や締めつけを行えば、反対側に突破口を求めて破裂するものである。猫だつて、いつまでも狭い場所を押し込めばおけない。まして、猫が虎だつたら、どれだけオリにとじ込めておかれるというのか、よくよく考えてほしい。アメリカとヨーロッパとイスラエルの政策は、虎をきゅうくつな場所に押し込めておこうとするものだが、あと

何年それが可能か。

テヘランで何が起ったのかを忘れてはならない。イランのシャアの超大国はどこへ行ったのか。シャアに与えられたアメリカの巨大量の武器はどうなったのか。イスラエルでも同じことだ。アメリカはほう大な武器を与えているが、それもどれだけ続けようというのか。

——日本の外交評論家の加瀬英明氏の質問に答えて（一九八〇年九月六日、ベイルート）

私は、かつてエジプト軍の予備役将校でもあったので、エジプトについてはよく知っているつもりだ。エジプト人たちは彼らの母なるナイル河と同じだ。表面は甘美で静かであるが、一たび洪水が起れば、一切のものを押し流す。

テヘランで起ったことを忘れてはならないし、同時に一九五二年にエジプトで何があつたかも忘れてはならない。イギリス軍に対して民衆はたちあがり、首都に火を放つたのだ。ファルーク王の支配の時代だ。

おそれ早かれ、エジプトの夜明けは必ずやってくるものと確信している。このことでは全く心配していない。私は自由の戦士であるが、歴史の流れを説める人間でもある。なぜなら私は歴史の流れと共にあるからである。しかも歴史の流れ

それが読める者は、自ら語らずに歴史自らに語らせてきた。実践が何よりも雄弁だからである。

地理的にも歴史的・経済的に見ても、日本とアラブとの関係は濃厚であり、この関係は更に強化すべきである。日本の中東外交は経済的側面にのみ目が向けられているが、パンのみに生き、大義を欠くならば、動物と同じである。

日本人がパレスチナ人民の立場を支持するアラブ諸国と同調し、関係を改善するならば、石油危機などというものは存在しないのである。

——日本社会党の上田卓三議員との会談で——(九月六日・ベイルート)

問題はきわめてわかりやすく、はっきりとしている。あなたがたは経済的利益を口にする。日本は八〇以上の石油を中東地域から必要としているにもかかわらず、この地域の最大の問題であるパレスチナの大義を支持していない。われわれの大義への支持を拒否したままで、あと何年間、アラブ側が石油の供給を保障してくれるのかをあなた方は自らに問うべきではないのか。

経済問題だけを口にするのは、恥ずべきことだ。それは日本人民のころでは

ないと確信するからだ。私は、日本人民の精神と感慨、そのころに期待している。私がかつて少年時代に歴史で学んだ日本は、あらゆる形態の帝国主義、植民地主義と対峙した人たちにとって一つの模範であった。

(訪日計画について)

日本・パレスチナ友好議員連盟(木村俊夫会長)を通じ、PLOに送られた訪日招請は、たしかに受けとった。われわれの訪日計画も、日本側にすでに伝えてある。時期は早ければ五月、遅くとも六月になるだろう。滞日日程など、アレンジは最終段階に入っている。

私は、この訪問がパレスチナ人民の公正な大義、特に祖国に帰る権利、民族自決権の実現、祖国に独立国家を樹立する権利などの正しさについて、日本国民に説明できるよりよいチャンスになると確信しているし、日本の友好的な国民が、パレスチナ人民の大義を強く支持してくれていることに感謝している。

(日本政府の対PLO政策について)

日本に行ったら、すべてのことを日本政府と、こまやかに話し合うつもりだ。日本政府は、これまでPLOをパレスチナ人民の唯一の代表と認めていないが、私の訪問により日本のすべての立場が変わることを希望する。

私は、日本人民の精神と感慨、そのころに期待している。私がかつて少年時代に歴史で学んだ日本は、あらゆる形態の帝国主義、植民地主義と対峙した人たちにとって一つの模範であった。

(米国の関係について)

米国は現在、他国の利益を顧みず自らの利益だけを優先し、欧州や日本などの同盟国や友人を突き上げていく。米国は冷戦ばかりか、ある地域では熱い戦争(ホット・ウォー)をおっている。このように、全世界的に緊張状態を作り出している米国の動きをやめさせなければ、全人類が代価を支払うことになるだろう。もちろん日本もだ。

米国は日本の政策を押しさえ込もうとしていく。日本は経済超大国として、国際的に重要な役割を担っているし、日本は中東地域とアラブの国民と重要な強い関係を持っている。したがって、日本には歴史的な、また道義的な責任がある。日本政府はパレスチナ人の問題、つまり、われわれの祖国に帰る権利、祖国に独立国家を樹立する権利について理解し、支持を寄せてくれることを希望する。

——一九八一年四月十五日、ダマスカスでの「毎日新聞」の岡倉特派員との会見(要旨)より

阿拉伯の期待

アラファト議長訪日への期待と提言

日本各界百人のアンケート

再録

日本、パレスチナ友好議員連盟の木村俊夫会長の招待を受けて、アラファト議長が予定され、日本各界に大きな反響をよんでいく。本誌では、各界から百人の方々にアンケートで期待と提言を寄せていただいた。

相蘇完一(工業経済研究所)

いかなる方法、牛虻にせよ、議長は訪日は、大変に喜ばしい事であると考えます。これまでも、幾度となく訪日の話が立ち消えになりましたが、今度は三度目の正直となつてもいいと思います。日本側の「木村議長」の「努力」も高く評価します。私は昨年一月「レバノン」のサイドで御目にかつていますので、層よるこびの感を深く味わっています。

浅田光輝(立正大学教授)

アラファト議長が訪日されることになれば、それ自身が、パレスチナ解放闘争の、国際世論における一つの勝利を記録するものと思えます。訪日実現の上は、外交次元の「セブション」への対応にとどまらず、日本の人民の解放運動に与れる機会も少しも作られるよう希望します。

東庄平(日本アラブ文化協会代表)

シオニズム国家イスラエルを解体し、PLOのかわりてより提唱している「非宗

教的パレスチナ民主共和国」を樹立し、ムスリムにも、ユダヤ教徒にも、キリスト教徒にも平等な市民権を保障したときのみ中東の恒久的な平和がやって来る。PLO議長としてのアラファト氏から直接この点を説明してほしい。

シオニズムにしても、イスラミズムにしても宗教的イデオロギーの限界は目に見えている。イスラエルは政治的にも経済的にも崩壊寸前にある。帝国主義諸国にとつてもイスラエルの存在そのものが負担になっているのだ。日本帝国主義のアラファト氏招待もこのことを如実に証明している。

まだわからないのか、国境と民族を越えるものが何であるかを、

安孫子誠人(日本スコミ市民会議)

アラファト議長が多岐の問題を超えて、訪日を決定されたことに敬意を表するとともに、超党派外交の一つの大きな結果となつたことを喜んでおります。来日されるこの機会に、日本政府の正式承認はもちろんです。日本人のPLOについての理解と関心が高まることを、と念じております。

飯沼二郎(京都大学教授)

アラファト議長を心から歓迎します。日本は長い間、孤立した島国であったため、そして明治以来、政府がそのような島国根性を積極的に国民的団結のテコとして利用してきたために、日本政府は現在でも民族問題については、きわめて無理解です。アラファト議長の話に、日本政府、及び日本人がどれほど真剣に耳を傾けるか、大変疑問だと思いますが、それだけに、日本政府及び日本人に、民族問題に対して目を開かせるための、またとない機会だとも思い、大きな期待を持っています。

石川純一(時事通信外信部)

アラファト議長を心から歓迎する。七九年から八一年にかけて、われわれ日本を含め、PLOの直向した中東諸情勢の激変は、まさに抜きさしならない将来を同地域が迎えていること、を再認識させるものだった。日本は、その国家意思を決定するにあたり長いプロセスを必要とする世界でもまれな国である。このことをアラファト議長をはじめ

とするPLOが十分認識され、従来の外交努力を今後も続けられることを期待する。われわれは、石油のみを念願におく「バイヤー」では決してない。ジャーナリストのはしれとして、今年もPLOの動向を注視していきたい。

石渡延男(高校教師)

アラファト議長は、日本とアラブとの友好にとって画期的なことであり、到達点であり、出発点であるように思えます。アラファト議長には、なにをいっても「アラブの大義」について攻めて、語ってもらいたいと思います。さらに、パレスチナの子ども、日本の子ども、今日と未来について対話できたならば有益と思えます。

市井三郎(成蹊大学教授)

アラファト議長を心より歓迎します。またその期に、国連総会の圧倒的多数によって議決されたことを、日本政府が公式に認めることを願います。

色川大吉(市民連合世話人)

アラファト議長を心より歓迎します。アラファト議長を大歓迎する者

の一人です。残念なことに日本国民はPLOがなぜ、何のために戦っているのか、という点について、真実を理解していません。アラファト議長には、その点を直接日本国民にたいし、くり返し話しかけてくれるよう希望致します。その際、日本政府などには如何なる遠慮も不要であります。

太田時男(横浜国立大学教授)

汚れた歴史を抜け、打算を超えた、新しい哲理の機能する、新機軸の関係樹立のため、相互の努力を。

大野明男(社会評論家)

心から歓迎します。警備上の問題もありませんが、一回は、私も出席できる大衆的集会での演説を期待します。

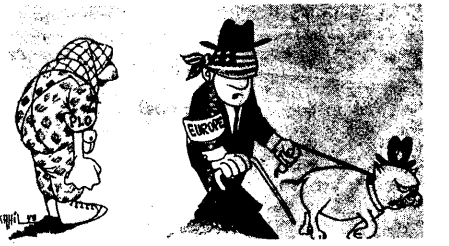
小笠成美(大阪YMCA)

アラファト議長を心より歓迎し、日本とパレスチナの友好が深まることを願っております。

岡田利春(衆議院議員)

パレスチナ人民を代表するPLOアラ





アラブ議長の来日を心より歓迎します。来日を機にパレスチナと日本の相互理解が深まりその友好関係が一層前進することを切望します。

岡野加徳留(明治大学教授)

アラブ議長来日を歓迎、未来に向って、深い友好のきずなを来日の機に創られるよう希望しています。

小澤貞雄(秋田高陽教会牧師)

(一)パレスチナ問題についての関心を昂め、正しい認識を広めるために、大いに有効であると思う。
(二)殊に一般には、事情の深い根源を究めないままに、暴力的対決、紛争の状況によって、うとましいという感情による拒否反応が大きい。この点、充分な説明や解明が必要と思われる。
(三)PLOが国際世論の支持を必要とするなら、それに役立つような努力を積重ねて欲しい。殊に非暴力的な方向で。

小野 周(東京大学名誉教授)

アラブ議長来日の日本訪問を心から歓迎します。これを機会に政治的問題を抜

きにして、今後自由な交流と友好が進められるよう期待します。

甲斐静馬(中東調査会)

アラブ議長来日は日本人とパレスチナ人の友好増進に寄与する画期的な出来事として歴史に残るでしょう。パレスチナの大義を支持する日本人の一人として熱烈に歓迎します。われわれは、これを機会にパレスチナとの連帯運動を飛躍的に強化するため、あらゆる可能な措置をとるべきだと信じます。

篤山 京(上智大学教授)

議長来日を歓迎します。この機会を、パレスチナの国家再建に果たすべき日本の役割を卒直明確にする機会として下さい。単なるイデオロギーの争いで下さない具体的な方策をはっきりさせて下さい。そして協力の方途を示して下さい。

梶谷善久(ジャーナリスト)

パレスチナ解放闘争を支持し、連帯の微力を捧げたいと思っている日本人の一人として、アラブ議長来日を心から歓迎いたします。

片寄みつぐ(A・A美術家会議)

八〇年代になり、世界は益々反動化と非道、暴力を肯定する中世期化現象に傾斜しつつありますが、このような傾向と闘うPLOの議長来日は、共に闘うわが国の心ある人々を強く励ますものになるでしょう。石油という物質を越えて世界平和への連帯をつよく望みます。

片岡清一(衆議院議員)

アラブ議長来日の訪日を心から歓迎します。アラブの大義に根ざすパレスチナ自治、もしくは独立は中東平和の基礎であると信じ、その実現のために努力してゆきたい。イスラエルのかたくなやり

方には強く反省を求めたい。

金山明子(画家)

慢性化した経済危機の中で、何とか打開策をはかるうとしている資本主義世界体制は、あらゆる手段をもつて、いわゆる発展途上国の民族主義を、世界革命の方向へ向かうことを阻もうと、過去も続けてきたし、また今後はその動きがより活発になるであろうと考えます。一国で真に民主主義革命を完遂することが不可能な現在、国際主義の立場に立ち運動を展開していくことを望みます。

上原益夫(アブダビ石油顧問)

アラブ議長来日の御来日一日も早く実現することを祈ります。

川合貞吉(ジャーナリスト)

アラブのシムール文明は、ルネサンスの源流であり、今日の世界文化の原点でもある。日本もまたその恩恵をうけていた。古代アジアと中東は一つであった。アラブ議長来日を機に、十九世紀の西洋文明に毒された日本人の反省を促がしたい。

河上民雄(衆議院議員)

日本政府がPLOをパレスチナ人民を代表する唯一合法の組織であることを確認し、アラブ議長に、それに基づき適切な接遇をなすよう日本側で努力すると共に、PLOのアラブ議長来日を歓迎するならば日本とアラブ諸国人民の友好を前進させ、中東問題の解決に大きな展望をもたらすものと確信している。その意味で各方面の国をあげての歓迎をなすべきである。

川端純四郎(東北学院大学教授)

昨年七月の国連パレスチナ問題決議はパレスチナ人民の譲ることのできなない権利の実現を基礎とするパレスチナ問題の

公正な解決を求めています。賛成112反対7で採択されたこの決議は全世界の声を明示しています。日本政府が棄権にまわったことは大変残念です。日本の世論に訴え、政府の態度を改めさせるためにも、アラブ議長来日は重要な意味を持つと考えます。実現を祈ります。

北沢方邦(信州大学教授)

あまりにも遅すぎたという感じがなきにしもあらずですが、日本側の大きな一歩前進だと思います。これを機会に日本人の理解が薄いパレスチナ問題の根本を、多くの人々に納得させるとともに、日本政府の中近東外交姿勢をバックボーンの通ったものにさせ、「資源外交」などといういやな言葉を徹底的に追放する機会にしたいものです。

北沢正雄(国際問題研究家)

アラブ議長来日を招待する時がようやくやってきた。遅きに失するといっているのはシオニストに連なる世界の反動的諸勢力によるPLO弱体化の新しい企てが進行し、新しい中東の危機が迫っているからだ。アラブ議長来日の機会にPLO東京事務所が外交特権を認めさせ、このことは実現したいものである。

木村知己(日本キリスト教団牧師)

来日を歓迎します。
(一)何人といえども不当に生活を浸されることのないようパレスチナの実情を日本人が当事者より聞くため。
(二)真の平和は平等な生活権利が保証されることで、権利を侵されている側の訴える場が保証される必要があるため。

木村三山(書詩作家)

おいでになったなら、いろいろのメデアに許すかぎり登壇し偏見と誤解をどき、島国根性の絶叫型愛国人間に知らせる場が保証される必要があるため。

津田道夫(著述家)

アラブ議長来日の日本訪問を歓迎します。それにして、日本人の間に、パレスチナ人民の権利回復の意義、実情が殆ど理解されていない実態がありまます。知らぬということは、帝国主義者どもによる権利侵犯行為に厳密に言え客観的に加担することになるわけですから、一大啓蒙運動が必要と考えます。

津村 晋(評論家)

賛成です。しかし、政府外交トップレベルでの訪日後の交流は、一つの日本国民への大きな関心事にはなると思いますが、それでは、真のパレスチナ人民の声と、日本における搾取され、差別されている人民との真の連帯は期待薄なのではないでしょうか。是非、訪日後の日程には、日本の中で現在、苦しくも闘い続けている諸団体との討論、連帯が必要だと思います。その事柄には、単なるマスコミ的なものになってしまし、以後の、日本におけるパレスチナ解放闘争の意味も半ば合うものも少ないものになつてしまつてはならないでしょうか。抑圧された人民同志の交流こそ訪日の重要な意味と信じ連帯と叫ぶことができるでしょう。

東海レディス・プラザ

私共は家庭の主婦なので勉強不足でお恥かしいのですが、祖国の為に寝食を忘れ戦つておられる方々に敬意を表します。地球上から戦争という悲しい出来事がなくならない限り、真の幸福は得られないと痛感いたします。パレスチナの人達が幸せに祖国の住人としてお暮らしになれます日を一日も早くらんことをお祈りいたします。

梅野泰二(衆議院議員)

日本政府の公式招待ができないのは残念だが、諸情勢を考慮し、アラブ議長が友好議員連盟の招待に応じられたことに敬意を表する。日本政府は実質的に政府招待と同等の待遇を行い、これを機に日本・パレスチナ間の積極的友好を一層、推進すべきである。

中岡三益(アジア経済研究所)

日本パレスチナ友好にとって画期的な新しい段階に向かうステップです。日本側から友好関係をすすめる「具体案」が提案されることを期待しています。

中谷武世(日本アラブ協会会長)

PLOのアラブ議長来日は、我々が内定したというよりは、新年の朗報で御同慶に堪えませぬ。殊に私共は一九七一年一月アルジェにて日本人として最初にアラブ議長にお目にかかり、その時以来我がアラブ協会の名に於いて御招待申し上げ、更に一九七五年四月、カイロのハテム事務所に於ける再度の会見の際にも、重ねて議長来日を招聘した私共アラブ協会同人としては、長年の待望が



今、少しでも理解を深めることができれば良いのではないかと、是非、来日して頂き、広く日本人に現状を訴えて欲しい。

小中陽太郎(日本アジアアフリカ作家会議)

パレスチナ人民不屈の闘いは、日本のすべての闘う人への励ましと灯でした。私たちはアラブ議長来日の機に、PLOの国際的、国内的評価を一挙にたかめたいと思います。

近藤 豊(衆議院議員)

PLOが、イラン、リビア、シリア等アラブ過激派寄りになって了うことは日本の国論をPLO支持に統一するためには重大な障害となると考えます。

佐々木 敏(日本商工会議所)

アラブ議長来日の訪日により、相互の理解が促進されることを希望いたします。

芝田進午(広島大学)

アラブ議長来日の訪日を心から歓迎いたします。本来ならば、日本政府による正式招待の訪日であるべきですから、日本政府がアラブ議長を国賓として待遇することを強く要望します。同時にこの機会をつうじて、パレスチナ人民の義の実現が中近東問題の解決の大前提であることが日本国民にひろく理解されることをねがっています。

清水慎三(日本福祉大学)

双手を挙げて歓迎したいと思えます。日程の都合もありましようが、東京だけでなく、関西その他都合がつく限り歓迎のプログラムを組んで欲しいと思えます。

新藤健一(共同通信写真部)

イスラエルに入学するとアラブ諸国に行かれないという話を時々、聞きます。真偽のほどはわかりませんが、シナイ半島の現実を誰が、どの程度知っているのでしょうか。アラブ議長来日を機

アラブ議長来日の訪日されることは、日本国民のPLOへの認識を深め、PLOと日本国民との連帯を強めるとし、ひいては、パレスチナ人の民族的主権の回復に大きな寄与をすることでしょう。

土井正興(専修大学文学部)

アラブ議長来日の訪日は、我々が内定したというよりは、新年の朗報で御同慶に堪えませぬ。殊に私共は一九七一年一月アルジェにて日本人として最初にアラブ議長にお目にかかり、その時以来我がアラブ協会の名に於いて御招待申し上げ、更に一九七五年四月、カイロのハテム事務所に於ける再度の会見の際にも、重ねて議長来日を招聘した私共アラブ協会同人としては、長年の待望が

東海レディス・プラザ

私共は家庭の主婦なので勉強不足でお恥かしいのですが、祖国の為に寝食を忘れ戦つておられる方々に敬意を表します。地球上から戦争という悲しい出来事がなくならない限り、真の幸福は得られないと痛感いたします。パレスチナの人達が幸せに祖国の住人としてお暮らしになれます日を一日も早くらんことをお祈りいたします。

梅野泰二(衆議院議員)

日本政府の公式招待ができないのは残念だが、諸情勢を考慮し、アラブ議長が友好議員連盟の招待に応じられたことに敬意を表する。日本政府は実質的に政府招待と同等の待遇を行い、これを機に日本・パレスチナ間の積極的友好を一層、推進すべきである。

中岡三益(アジア経済研究所)

日本パレスチナ友好にとって画期的な新しい段階に向かうステップです。日本側から友好関係をすすめる「具体案」が提案されることを期待しています。

中谷武世(日本アラブ協会会長)

PLOのアラブ議長来日は、我々が内定したというよりは、新年の朗報で御同慶に堪えませぬ。殊に私共は一九七一年一月アルジェにて日本人として最初にアラブ議長にお目にかかり、その時以来我がアラブ協会の名に於いて御招待申し上げ、更に一九七五年四月、カイロのハテム事務所に於ける再度の会見の際にも、重ねて議長来日を招聘した私共アラブ協会同人としては、長年の待望が

本の大衆みずから力によって、アラファト議長(ひいてはパレスチナ人民)の希望される最良の条件のもとで、訪日を表現したいのです。しかし現状ではそれが無理というところであれば、形式でできるだけ早い時期に来日されることを希望します。そこからまたひとつ連帯の環が広がっていくことでしょう。

飯 峯明(同志社大学神学部)

来日招聘 受諾をよろこび、訪日を歓迎いたします。願わくば、この機会を通じて、あらゆるメディアを利用してパレスチナ問題を訴えられ、日本人が少しでも身近かなものとして捉えられるべく御配慮下さいたいことを希望いたします。

阪東淑子(高校教員)

アラファト議長来日を心から歓迎します。日本の中東外交は経済的側面にのみ目が向けられて、パンの面に生き、大義を欠くならば、動物と同じである……。私は、日本人の精神と気概、そのころに期待している……と言われたアラファト議長のことを身に沁みて感じています。他地域、他民族のぶつつかっている問題や真の痛みを感じることができると知性を感じるとともに培うことができるかが私たちの毎日の課題です。

平松 南民(国会代表)

アラファト議長の訪日は、日本人がパレスチナ問題を真剣に考えていくための必須条件だと思います。政府は石油問題

多くの困難や危機を乗り越えて、明確なパレスチナ解放の理念と柔軟な指導性を示されたアラファト議長は、パレスチナがパレスチナ、中東の実態、問題の所在を知るきっかけがつかめるよう、多くの機会がつけられることを期待します。

原 之夫(画家)

是非、来日してほしい。本来なら、日

八百板 正(日本社会党)

パレスチナ問題は世界の重要問題です。アラファト議長が訪日することは、この問題との関わり合いを日本が国民的に深めることとなります。

山川 曉夫(評論家)

アラファト議長来日は日本の政治の中でも画期的な意義を持つものと信じます。心から支持し、その訪日がPLOの立場からも日本人の立場からも、実り多い豊かなものになることを期待します。

山本 進(国際問題評論家)

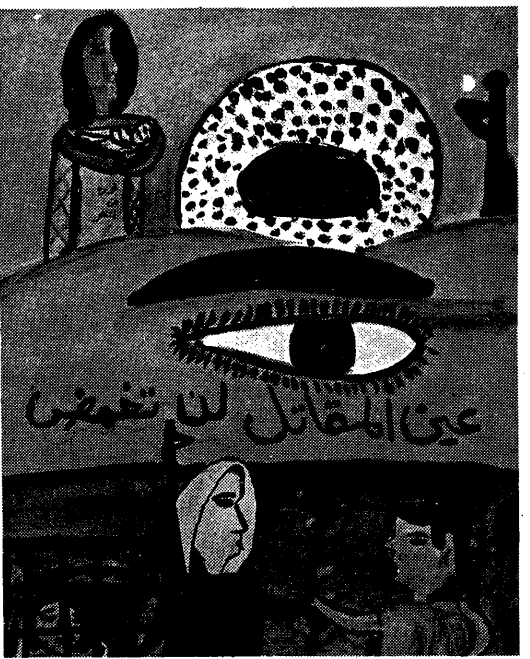
パレスチナ解放闘争についての意義を、アラファト議長自身が、直接、生々しく日本人に語りかける機会がやっとなれようとしていきます。この問題に無関心の人々を、開眼させることでしょう。

鷲見哲彦(画家)

多アラファト議長訪日決断のニュースは八一年々頭を飾るビッグニュースです。これを機会に私達は政府に、depression、active、などといった表現を止めさせて、PLOを唯一合法のパレスチナ民族の代表である、と正式承認させ、駐日代表事務所に対する外交特権などを与えるように強く働きかけたい。これを表現させる事が私達のとりあえずの歓迎の意志表示となる。アラファト議長を始め多くのパレスチナの友人の来日を心から待ち望みます。

和田八束(立教大学)

パレスチナの実態と、パレスチナ問題の本質とが、日本人に理解されることを期待します。



浜田 稔(ウヰマの会)

私共は、パレスチナ問題については無知な国民である。それは、大東亜共栄圏という名の侵略戦争に執中していた時にある大國と狂言者が、イスラエルという歴史上の汚点を計画し、敗戦で国ができたの、に精いっぱい時に凶行されたの、そのアメリカにも、国土も文化も占領されてきたことにも。ことわざに「私を作った、魂を入れろ」というのがあり、私共が、アラファト議長を呼ぶということはどういふことなのか。今までのマスコミはわれわれに何をさせたのか。政府は、パレスチナの人々に、いったい何をさせたのか。私を作るだけで終るのではないのか。まずその前に、この魂にあたるものは、パレスチナ問題の本質を、国民の一人一人が、真剣に考える必要がある。

畑 和(埼玉県知事)

アラファト議長来日を心から歓迎します。一九七四年の国連総会におけるパレスチナ決議の趣旨に沿って、中東における公平で永続的な平和が一日も早く確立されることを強く望んでおります。アラファト議長来日はPLOについての正しい理解を日本国民の中に広め、問題解決の為に役立つものと思っております。

秦 豊(参議院議員)

櫻の頃には是非、訪日を表現してもらいたい。それを機会に、パレスチナ問題が劇的に前進することを心から願っています。何よりも市民レベルで理解と認識の深まること優先です。

何事も、遅ればせながら……日本の今回もその例にもれず、というのが私の気持ちです。が、日本政府は、アラファト議長を、国家の代表として、誠実な態度でぞみ、パレスチナ問題に対して、打算のない前向きな姿勢を見せてほしいと強く希望します。

西垣内堅佑(弁護士)

PLOアラファト議長来日を歓迎いたします。以前、加瀬英明氏のアラファト議長インタビューをテレビで見ました。そこで、「日本人の責任」が問題となっていました。パレスチナ問題に主体的に関わるということは、日本人の一人としてその責任を問われるということ抜きには関わり得ないのだということを感じさせられました。日本人の責任という観点からも、PLOアラファト議長来日を強く希望するものです。

奴田原 睦明(東京外国語大学)

この民衆にして、この指導者あり、という感じに打たれる。来日の際には、われわれ日本人を辛直に一喝してくれるよう望む。

野添憲治(ポライター)

日本政府がPLOを唯一のパレスチナの代表だと承認しないのは、アメリカ政府への恩恵という、自主性のなさからきている。それだけに、一日も早くアラファト議長が来日して話し合いをし、日本政府は、またPLO駐日代表事務所に外交特権をあたえ、それに従って早急に承認すべきである。外務省はアメリカだけに気を使わず、すぐにでも正式旅券を出して日本に招待するようにはしてほしい。来日を心から願っている。

野間 宏(作家)

アラファト議長の訪日は、たしかに日本とパレスチナ両国民の友好の深いき

実現されるわけで悦び一入であります。つきましては、アラファト議長折角の来日を充分意義あるものにするために、アラファト議長を、国家の代表として、誠実な態度でぞみ、建設的に善意と英知を傾倒しなければなりません。そのためには、一、アラファト議長は全国的に歓迎し、招待者である、二の団体がこれを独占しないこと。

二、アラファト議長を個人または団体の宣伝に利用しないこと。特に国会議員諸氏にはこれを選挙関係やスタンド・プレイ等に利用しないよう自重することを希望する。

三、アラファト議長来日を以てパレスチナ問題の解決と、PLOの参加を含む公正にして永続的な中東和平の実現を積極的に推進する契機ならしめるよう政府民間一体となって努力すること。

四、ア議長の歓迎行事、政府首脳との会談等を単なる儀礼的形式的なものとせず、実質上日本政府によるPLO承認を意味するものとして国際的に受け止めさせるよう最善の配慮をすること。

五、ア議長が直接国民大衆に訴えるための大会場における公開講演会を設定すること。

中馬弘毅(新自由クラブ大阪府)

わが党からも補次代議士がPLOを訪問し、一層の認識を深めております。日本とパレスチナ両国民の相互理解と友好のために議長訪日の実現を望むものであります。

名東孝二(日本大学教授)

大賛成。これを機会に、イスラエルが先の「国連決議」に従って占領地から撤兵、ヨルダン川、西岸地区にパレスチナ人固有の国家を結成できるように、いつその努力を日本人は為すべきである。

長山侍子(東京外国語大学)

を念頭においてPLOに接近しているのてしようが、わたしたち市民としては、21世紀を視点にすえて、民族と国家の問題として本質を掘り下げていきたいと思っております。政治のレベルだけでなく市民のレベルでぜひ議長と接触する機会を作ってください。

福岡義登(衆議院議員)

心から歓迎する。これを機会に一層友好を深めたい。

福島新吾(専修大学教授)

実現を期待しますが、PLO側はその



条件として、何を求めているのでしようか。その条件をまず、日本国民が広く検討すべきだと思えます。

実現すれば、PLOが秩序ある政体であること。その主張する「アラブの大義」を日本国民が広く知り、考え、日本がその為に何を寄与することができるかを討議する機会になると考えます。

星野郁夫(日本社会党中央本部)

訪日は、大変意義深いことだと思えます。しかし、日本政府が、アメリカの対外政策にそって石油というわけでのみ動いている現実からしてパレスチナに理解

を示す革新勢力との結びつきをまず前提においてほしいと思えます。

穂積七郎(元代議士)

心から、且つ大いに歓迎します。かねてから来日の実現を、期してまいりました。これを機会に、今年日本、パレスチナ両国民の飛躍的な友好、発展を期して、これを基礎に、法権な日本政府をして、PLOの政権承認にふみ切らせねばならないと思えます。

本田良寛(大阪社会医療センター)

ひとつひとつの、積み重ねがここまでの来たものと思えます。然し、いろいろな想いを隠してパスに乗ろうと言う人もいます。筋を通して対応されますように御願いたします。そして日本の表面のみでなく、実際も分っていただくよう御努力下さい。

正森成二(衆議院議員)

アラファト議長の訪日は、同様の基礎の上に日本とパレスチナ人民の友好関係の発展の機会となることを希望します。

松本健一(評論家)

政治的友好は、政治的判断によって、危ふきに至ります。民族的、文化的な次元からの友好関係の樹立を、

丸山邦男(ジャーナリスト)

国民挙げての歓迎世論を盛りあげたいと思えます。オ三世の理想は何かを知り、高く掲げる理想の旗を失った私たち日本人(アジアの一員として)の明日の指標を鮮明にするためにも是非。

村上 安(社会運動家)

アラファト議長来日を心から歓迎します。日本外交の意味ある一歩となることを願います。しかし、私たちがとって重大なことは、アラファト議長来日

日本人による会見記再録

「中東」米追隨の日本

会見内容

【ベイルート十六日】谷川特使【十五日行われたアラブ首脳会議】議長、上野・日本アベリ事務次官の二問一答の要旨の通り。

——日本国民は、サダト（エジプト大統領）和平イニシアチブは少くとも中東における戦争防止に効果があると思えるが、PLOがサダト・イニシアチブに反対する理由は何か。

議長 サダト大統領もベギン・イスラエル首相も同じことを言っている。果たしてそうか。（三月）イスラエルはレバノン南部を侵略し、西岸地区、ナバーム、F15戦闘機、ランス・ロケットなど最新の兵器を運んでわれわれレバノンの人々を攻撃したではないか。この戦争で千人以上の民間人が亡れ、八十二の村が破壊され

我々は何びとも追いつかない

小田 実氏

「天下大乱を行く」より

小田 エジプト・イスラエル平和条約調印後、いろいろな事が起きているが、この平和条約についてどうみるか。

アラファト あれは平和ではなく強制された「平和」だ。この地域にダイナマイトを投げ込んだようなものだ。この条約はパレスチナ人、アラブ人、さらにはエジプト人のために何をしよう、例えばパレスチナ人に「セルフ・ルール」（自治）を与えたというが、正確に言えば「セルフ・アドミニストレーション」（自己管理）だ。我々は自己管理を断固拒否する。またエジプト人の見地からいえば、彼らは数カ月後にシナイ半島の一部を取り戻すかもしれないが、その主権は不完全だ。そればかりかエジプト政府は主権の一部を失った。条約はエジプトとイスラエル両政府間関係を他の関係に優先させており、両政府間の約束がアラブ諸国を含む約束に優先することになっている。サダトがいかにエジプト国民の利益に反して譲歩したかわかるだろう。さらにいうなら、この条約がイスラエルの条件にあわせて出来上がったことは明らかだ。それどころか、この条約はずっと以前に「ニューズウィーク」や「タイム」に出していたとそっくりだ。

ふあいのんく

ファイリング

十三回のパレスチナ民族評議会（PNC）PLOの最高議決機関で、イスラエルから解放されたパレスチナの土地の部分でも独立した国家を樹立することに合意した。それ以前は、パレスチナ（全土）にキリスト教徒、ユダヤ教徒、回教徒などが（宗教、人種を超えて）共存する国家をつくることを目指していた。PLOの現在の立場はPNCの決議通りである。

イスラエルはわれわれの前の方針に反対していたが、PLOが新たな方針を出す、それにも反対した。イスラエルはいかなるわれわれの仕方にも反対している。中東の平和な解決は、世界の平和とありえない。特に、この地域の石油資源の重要性を考えると、日本は、将来は、この地域に大きく依存している。日本国民は、われわれの人民の平和を真剣に考える義務を持っており、われわれはその権利を持っている。われわれは植民地主義、シオニズム、人種差別主義、新ナチズムの犠牲者だ。

——イスラエルが要求している安全保証の問題をどう考えるか。議長 今や国境を保持して威嚇する手段はイスラエルである。安全保証を確保してやるのはイスラエル人なのか、パレスチナ人なのか、

それともイスラエルなのか。イスラエルは原爆を十二ないし十五発持っているというのではない。——今月十二日、ベイルートにあるパレスチナ・ゲリラ急進派の事務所が爆破されたが、パレスチナ組織間の抗争、また意見の対立をPLO議長としてどう考えるか。議長 あの日、私がそこにいたと思う。現場から三十五分しか離れていない場所にあった。現場は私の事務所であり、私のカードなども損傷した。あの事件は、PLO内部の抗争によるもので、外部からの破壊工作によるものではない。私は委員会に調査を依頼したが、（外部からの破壊工作など）証拠が出ていない。PLO内部の意見の対立は、革命運動の民主的性質のためであり、私はむしろ誇りにしている。私の意見は、対立はPLOの組織が健全である証拠だ。——イスラエルに対する軍事作戦（アラブ攻撃）は、今後も継続するか。議長 同じ質問を繰り返しては、同じ答えを返さなければならない。もし、日本国民が同じ境遇に置かれたら、あなたは沈黙を守っているだろうか、われわれは、国連決議が実施に移されるのを十七年間以上待ち続けた。しかし、何も実行されなかったために、このような状況に置かれた。われわれはいかなる人民でもあることを始めたのだ。

これは完全なバックス・アメリカーナ（米国による平和）なのだ。数日前パンス米国防長官は、この条約の実施を見守るために米軍を親米小国軍とともに送るといふ重大な発言をした。この軍隊は国連決議外だという。何を意味するかといえば、シナイの米国による新たな占領だ。だから、私の考えではこの条約は、イラン革命の勝利のあとの米・イスラエル・エジプト軍事協定だ。しかし、いずれエジプトはこのアメリカの占領とたたかうだろう。小田 エジプトは今この不思議な条約から何を学んだのだろうか。私はエジプトが大きな譲歩をしたという考えに同意するが……アラファト いやエジプト人ではなく、サダトが譲歩したのだ。彼はパレスチナ人、エジプト人、アラブ諸国民の裏切者だ。アメリカはサダトをこの地域での自分の利益を守るために使うとしている。イランの皇帝のあとにはサダトだ。すべてのエジプト国民、グループが条約を拒絶したことが大変重要だ。小田 サダト政権を覆すための何らかの騒乱、混乱が起これるとみているのか。アラファト 必ず。遅かれ早かれね。学生たちのある者は、国を売り渡したと叫んでいる。小田 あなたはアラブ諸国を反エジプト統一戦線に駆り立てるのに成功した。アラファト 反エジプトではなく反サダトだ。我々はすべての国民、すべてのグループに対し、あらゆる手段でサダト路線とたたかうよう促さねばならない。小田 ところでアラブ世界の外にいる人びとはいう。「いつもアラブ諸国は次から次へと互いにたたかっている」と。だから近い将来その団結もそうなるのではないかと。あなたにはバグダッド会議でも団結をつくり出すのに困難したのではないか。アラファト そんなことは当然だ。しかし、アラブ連盟の移転についてエジプト政権がどう言ったか思い出す必要がある。サダト政権はアラブ連盟本部がエジプトから移されるということは何を意味するかを理解し始めたというわけだ。すなわちエジプト及びサダト政権のアラブ世界での孤立ということをね。小田 もう一つ思い出して欲しい。米国のプレスやサダト自身「サダト抜きでアラブ首脳会議は開けない」と言っていたものだ。しかし我々は彼なしで首脳会議を開き、それは成功だった。小田 アラブのこの種の団結が長期間続くと思うか。アラファト 間違いない。小田 よくわかる。しかし例えばあなた方はシリアとあの激しい内戦をやって殺し合いをした。いまヨルダンともまた同じことが起きている。信じられないところがある。

のアメリカ人が、それを行って、
 「家族間」の争いというのなら、また起こるのではないか。
 アラファト 何のためにか。シリアとの戦いについていえば、あれはアメリカの陰謀に乗せられたのだ。
 小田 シリアの側だけでなく、あなたたちの方もか。
 アラファト たしかにその通りだ。いまや我々はシリアと良い関係に立っている。
 小田 つまりイスラエルはアラブ世界すべてにとって、それがアラブ世界内の団結の源泉であるために、必要なのではないかという点だが。
 アラファト そうじゃない。我々は数世紀来、多くのトラブルに相対して来た。英仏の占領の侵略だ。我々はこれらの要素を追放しなければならぬ。
 小田 そのあと、一種の統一アラブ世界を得られるというわけか。
 アラファト それが我々の目的の一つだ。
 小田 パレスチナ人の将来について、いま「ミニ国家」の創設が言われている。これに対しPLO内に「拒否戦線」と呼ばれるグループがある。あなたは「ミニ国家」の創設を支持していると思うが。
 アラファト 私は我々のホームランドのいかなるところであれ独立国を作ることとを支持するだろう。それはパレスチナ民族評議会の決議だ。我々は我々の民主主義を誇りに思っている。この革命において、何びとも自分の意見をはっきりと、かつ率直に発言する権利がある。それが民主主義だ。
 小田 占領地問題だが、日本人にとってこの問題を理解することは時に難しい。例えば解放後に、ユダヤ人は追い出されるのか。
 アラファト 我々はこの地域の何びとも追い出そうとはしていない。私が一九七四年に国連で、ユダヤ教徒、クリスチャン、イスラム教徒の平等を保障する民主的パレスチナ国家の呼びかけをしたことを忘れてはいけない。
 小田 他国の革命についてだが、イラン革命は世界の将来にとって重要だ。あなたはホメイニ師を強く支持しているようだ。
 アラファト 彼が我々を支持しているのだ。イラン・イスラム共和国はあらゆる点から見て強力だろう。大きな国で石油とマグネシウムなど資源を持っている。
 小田 イランと違って、あなた方は占領地解放後、政教分離の国を造ろうとしているようだが。
 アラファト どんな国を造るかにして我々の国民は全く自由由政府の形態を選ぶことができる。それが民主主義だ。
 小田 中国とソ連、ベトナムとカンボジアといった社会主義国間に存在する困難について。
 アラファト 我々は社会主義国のおすべとときわめて良い関係を持っている。
 小田 しかしあなたの立場は中国へよりもソ連の方に傾いているように見えるが。
 アラファト ソ連との関係が良好なのは確かだが、北京ともまた良いのだ。私はきょう華国鋒主席から手紙を受け取った。また我々はベトナムとも緊密な関係を持っている。我々は、社会主義国間の衝突を兄弟間の争いとみている。
 小田 日本の人々へのメッセージがあったら、いつてほしい。
 アラファト 日本人はアジア人として帝国主義、植民地主義の害悪を知っており、核戦争の犠牲者としての経験も持っている。だからパレスチナ人民に対する圧制が何を意味するか、理解してもらえらると思う。パレスチナ人民の六割までが故郷を追われた難民である。しかし我々は平和を、正しい平和を達成するだろう。日本はアジアの極東にあり、パレスチナはアジアの極西だが、いまだにパレスチナ解放闘争の意義、権利を正当に認めようとしない日本政府の現在の立場にもかかわらず、この地理的なへだたりがパレスチナ人民とアラブ民族の正義の戦いへの政治的支持を弱めることがないように期待したい。

石油偏重は誤り

日本外交を厳しく批判



アラファト PLO議長

サンケイ新聞一九八〇年九月十八日

石油だけを重視した日本の外交について厳しく批判した。また緊張がいつく中東情勢について「米国の出兵をたいはわれれば早晩、武器をそろえよう」と第五回中東戦争の可能性を察した。加藤氏との対談の通り。

——日本に何を期待するか。
 「日本は中東を経済的見地とく石油をばらばら奪われていく。しかしわれわれはアラファトの大義（パレスチナ解放）があり、石油権を奪取する目的（イスラエルの日本について強硬だが、日本は旧宗主国主義、植民地主義）に抗してきた愛敬の存在だ。現在は新植民地主義に加担して、新帝

「米に追従、石油追求」

——ECC首脳会議は三百、PLOの中東和平交渉への参加を呼びかける宣言を発表したが、欧州諸国のイニシアチブをどうみるか。
 アラファト議長 欧州諸国の宣言は、前向きではあるが、十分なものでない。私達はその以上のものを期待していた。PLOはパレスチナ人民の唯一の合法的な代表として国連加盟国五カ国によって承認されているが、欧州諸国及び日本政府は国際的なPLOの合法的権利を認めない。

——日本政府的パレスチナ問題への態度をどう思うか。
 議長 最近日本の国会議員からの招待があった。それには感謝している。しかし私はPLO議長でありPLO議長として公式の招待が日本政府からなれば日本に行くわけにはいかない。正式の招待があれば喜んで行くだろう。
 日本の政府も民衆もパレスチナ問題を十分に深く考えてはいない。彼らはこの地域で自分達の利益だけを考えているからだ。——経済的な利益という意味

「米に追従、石油追求」

石油追求

毎日新聞六月二十三日 芝生短期生



(一九七九年四月一七日、ベイルートで)

議長 石油と市場の追求だけだ。パレスチナの問題については残念ながら米国の立場を固めておられる。外交に於いては追従している。しかし日本の民衆がこのような政策を支持し続けるならば、彼ら自身の利益を損なうことになる。

議長 パレスチナ人を苦しめてくるのはユダヤ人ではなくシオニストのグループだ。ユダヤ人とは何世祖の間違は平和に一緒に住んで来た。これからは一緒に住むべきだ。私達が戦っているのはシオニストとアラブ人だ。私はユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒が一緒に住める国を造りたい。アラブ人を抑えてきた。子供達にもユダヤ人を憎むという教育をしている。

議長 あなたは一九四四年の国連総会、ユダヤ教徒、イスラム教徒、キリスト教徒が平和に平等に住める非宗教的な統一国家をパレスチナに作るべきだ。この考え方は正しいではないか。

議長 私の立場はパレスチナ国民評議会(PLO)の決定に則してはならない。私たちは必ず二つの解決案を示した。一九七四年の提案に続き、一九七七年にはイスラエルが撤退した土地(あるいは解放された土地)にいつまでもわれわれの独立国家をつくらなければならない。別の解決案を示した。しかし、これらはすべて拒否され続けている。キャンピング・ベッド合意はベキン、カーター、サダトによるわれわれ民衆の意思に対する陰謀である。

議長 テロによって足を失ったシヤカ・ナブルス市長やカラフ・ラマフ市長などPLO支持の市長はイスラエル国家を承認した上、パレスチナ国家をそれと並行して成立させることを望むと語った。この点についてはどうか。

議長 彼の発言は自由だ。しかし彼らはパレスチナ民衆の意思の基となるPLOの決定に従わなければならない。私が言ったことはPLOの決定に則したものだ。

議長 あなたは二つの国家、イスラエル国家とパレスチナ国家の平和共存を認めるか。

議長 私は二つの国家を一度も発言していない。重要なのはわれわれの国家の成立だ。もう一方の側については問題にしていない。パレスチナ人が自分の独立国家を成立させるべきだ(その権利が)重要なものである。

の解決案を示した。一九七四年の提案に続き、一九七七年にはイスラエルが撤退した土地(あるいは解放された土地)にいつまでもわれわれの独立国家をつくらなければならない。別の解決案を示した。しかし、これらはすべて拒否され続けている。キャンピング・ベッド合意はベキン、カーター、サダトによるわれわれ民衆の意思に対する陰謀である。

議長 テロによって足を失ったシヤカ・ナブルス市長やカラフ・ラマフ市長などPLO支持の市長はイスラエル国家を承認した上、パレスチナ国家をそれと並行して成立させることを望むと語った。この点についてはどうか。

議長 彼の発言は自由だ。しかし彼らはパレスチナ民衆の意思の基となるPLOの決定に従わなければならない。私が言ったことはPLOの決定に則したものだ。

議長 あなたは二つの国家、イスラエル国家とパレスチナ国家の平和共存を認めるか。

議長 私は二つの国家を一度も発言していない。重要なのはわれわれの国家の成立だ。もう一方の側については問題にしていない。パレスチナ人が自分の独立国家を成立させるべきだ(その権利が)重要なものである。

湾岸への拡大は既に防止

朝日新聞一九八〇年十二月十日

朝日新聞はPLOのアラブ人代表の訪問に際し、一答は次の通り。

——PLOが自派パレスチナ国家の性格(領土の範囲)について、

イスラエルの建国(一九四八年)以来、六割のパレスチナ人が祖国を追われ、四割は占領地の奪回を余儀なくされている。われわれは犠牲者であるという立場を堅持し、

それにもかかわらず、われわれは自派パレスチナ国家の平和共存を認めるか。

議長 私は二つの国家を一度も発言していない。重要なのはわれわれの国家の成立だ。もう一方の側については問題にしていない。パレスチナ人が自分の独立国家を成立させるべきだ(その権利が)重要なものである。

最近、イスラエル外務省からも同大橋を通じた同様の趣旨のメッセージを受け取った。

イスラエル・イスラエル戦争の戦火が(パレスチナ)湾岸産油国(他)の地域に飛び火するのを防いだことが、重大な成果をあげたと言われている。われわれは待たずに努力を継続中だ。

——同戦争がPLOに与える影響について。

この戦争はイスラエル・イスラエルの国民の利益に反している。パレスチナ人民はパレスチナの大義に反対して、だから私は終始この戦争に反対し、停戦に導くために全力をあげている。この戦争の唯一の勝利者は米国の軍力だ。

——イスラエル・イスラエル戦争、イスラエル・イスラエルの対立激化など、アラブの団結「はびこっている」を認めるか。

アラブ地域は、また米国の影響を受ける被害を受け続けている。キャンピング・ベッド合意は、何だかどうかわからない。つまり、全アラブに対する陰謀だ。

——アラブの対立激化など、アラブの団結「はびこっている」を認めるか。

アラブ地域は、また米国の影響を受ける被害を受け続けている。キャンピング・ベッド合意は、何だかどうかわからない。つまり、全アラブに対する陰謀だ。

私は、単なる(調停者)ではなく、イスラエルの立場からアラブの団結「はびこっている」を認めるか。

アラブ地域は、また米国の影響を受ける被害を受け続けている。キャンピング・ベッド合意は、何だかどうかわからない。つまり、全アラブに対する陰謀だ。

——アラブの対立激化など、アラブの団結「はびこっている」を認めるか。

アラブ地域は、また米国の影響を受ける被害を受け続けている。キャンピング・ベッド合意は、何だかどうかわからない。つまり、全アラブに対する陰謀だ。

たらず役割をこなしている。

——日本・パレスチナ友好議員連盟の使節団が議長との会見を予定している。同使節団に何を期待するか。

議員使節団の来訪を歓迎する。私は同使節団にわれわれの悲劇、そしてパレスチナの大義について、あらゆる角度から説明したい。同時に日本政府が依然、米国の影響で「我々」の圧力下にあるのかどうかを聞いてみたい。

日本がパレスチナの大義を認めるべきだ。アラブ地域で自らの国益を害することを望んでいない。(米国の)おぼろげに面しては日本の利益は損なわれる。

——議長の訪問問題について。

私の訪問問題は「古」だが、しかし大きな物語だ。私での招待を受け入れるべきかを考慮して、あなたのためには日本政府からの招待の持つ意義を理解する必要がある。私ではPLOの議長である。(実質上の)日本政府がPLOの議長を招待するならば、PLOの議長が手紙を送るべきだ。

たらず役割をこなしている。

——日本・パレスチナ友好議員連盟の使節団が議長との会見を予定している。同使節団に何を期待するか。

議員使節団の来訪を歓迎する。私は同使節団にわれわれの悲劇、そしてパレスチナの大義について、あらゆる角度から説明したい。同時に日本政府が依然、米国の影響で「我々」の圧力下にあるのかどうかを聞いてみたい。

日本がパレスチナの大義を認めるべきだ。アラブ地域で自らの国益を害することを望んでいない。(米国の)おぼろげに面しては日本の利益は損なわれる。

——議長の訪問問題について。

私の訪問問題は「古」だが、しかし大きな物語だ。私での招待を受け入れるべきかを考慮して、あなたのためには日本政府からの招待の持つ意義を理解する必要がある。私ではPLOの議長である。(実質上の)日本政府がPLOの議長を招待するならば、PLOの議長が手紙を送るべきだ。

たらず役割をこなしている。

——日本・パレスチナ友好議員連盟の使節団が議長との会見を予定している。同使節団に何を期待するか。

議員使節団の来訪を歓迎する。私は同使節団にわれわれの悲劇、そしてパレスチナの大義について、あらゆる角度から説明したい。同時に日本政府が依然、米国の影響で「我々」の圧力下にあるのかどうかを聞いてみたい。

日本がパレスチナの大義を認めるべきだ。アラブ地域で自らの国益を害することを望んでいない。(米国の)おぼろげに面しては日本の利益は損なわれる。

——議長の訪問問題について。

私の訪問問題は「古」だが、しかし大きな物語だ。私での招待を受け入れるべきかを考慮して、あなたのためには日本政府からの招待の持つ意義を理解する必要がある。私ではPLOの議長である。(実質上の)日本政府がPLOの議長を招待するならば、PLOの議長が手紙を送るべきだ。

激動の中東とPLO

アラブ人議長と会談して



宇都宮 徳馬 (衆議院議員)

パレスチナ解放機構(PLO)は、領土はユダヤ人に取られてしまっているが、四百万のパレスチナ人の美談の政府に「機能して」いない。それは学校、病院、託児所等の社会施設を有し、軍隊を持ち、強い外交機能を発揮している。

特任アラブ議員の間は、政府としての資格を事実上認められており、今度のシムナー外相・経済相候補は、カヌワール・政治局長が代表として出席し、シムナー外相と平和条約を「戦争条約」としての占領地域に与えるべきではないとパレスチナ人の奴隷化と批判するアラブ人の団結を「アラブ」の。

PLOは、教団に比し、明らかに強い。その理由は、パレスチナ人全土に道徳として、イスラエルを建国してはならない、イスラエルを世界の諸国に認められなければならない。アラブの大義が敗れたならば、再び西

の激戦の先頭に立ち、イスラエルを宣言している。

アラブ人議長は、シムナー外相と平和条約に対しては強硬な批判派であり、シムナーの石油輸出を禁止した。

PLOは、アラブの民族解放運動の旗幟であり、アラブの大義が敗れたならば、再び西

の激戦の先頭に立ち、イスラエルを宣言している。

アラブ人議長は、シムナー外相と平和条約に対しては強硬な批判派であり、シムナーの石油輸出を禁止した。

PLOは、アラブの民族解放運動の旗幟であり、アラブの大義が敗れたならば、再び西

あり、日本政府が漫然と今までの政策を続けることが許されるはずはない。新しい対応が求められなければならない。その中核をなすのが対PLO政策の転換である。

カーター政権は、PLOを正統と評価し、パレスチナ政策を大きく変換した。中東に安定した平和を打ち出すには、日本の重要な税金をムダ遣いするだけでは、日本の

なか追いついてきたことが多く、今度もそんな形勢がある。イスラエルの経済援助の中で日本を大きく上回っている。その中の海軍艦隊も、政治屋の姿が早くもアラブに対して、とるべきである。

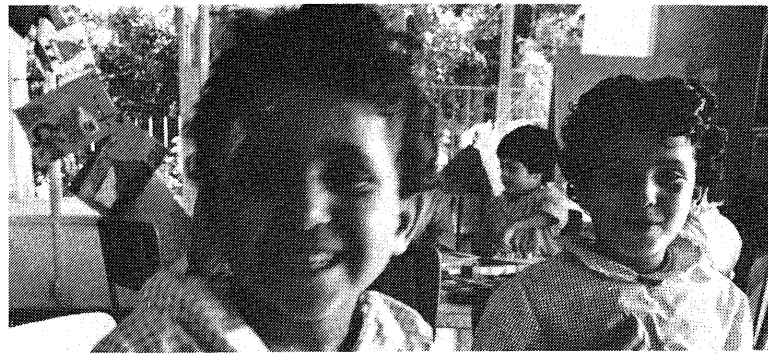
ホラして、とるべきである。国民の貴重な税金をムダ遣いするだけでは、日本の

なか追いついてきたことが多く、今度もそんな形勢がある。イスラエルの経済援助の中で日本を大きく上回っている。その中の海軍艦隊も、政治屋の姿が早くもアラブに対して、とるべきである。

ホラして、とるべきである。国民の貴重な税金をムダ遣いするだけでは、日本の

国連演説 (抜粋)

一九七四年十一月十三日 「パレスチナ」(三留理男編) 現代史出版会より



パレスチナ人——避難民の精神の拒否

過去の悲劇、現在の限界にもかかわらず、この国連総会に於て、私達は将来への信頼を宣言したいと思えます。もしも現在を論議するにあたり過去を私達のために奉仕させるのであれば、それは他の民族解放運動と並んで将来の私達の旅路を照らすためにそうしたい。

もしも今私達の目指しているものの歴史的な根について語るうとするなら、それは今、現時点において、彼等が私達の家々を占拠し、彼等の牛が私達の牧場の草を喰い、彼等の手が私達の果樹の果実をつみとっていながらも、私達が抜けがらの精神であり、実在しないフィクションであり、伝統も将来ももっていないと、主張する人々がこのなかにいるからです。私達が今、私達の根について語るのは、つい最近まで(そして今も)私達の問題を単なる避難民の問題としてあつかう人々がいるからです。彼等は中東問題を、単なるアラブ諸国とシオニズムの存在という国境問題以上のものとして描こうとしませんでした。彼等は私達民族は自分の権利でないものを主張し、論理も正当な動機もなく、ただ平和を乱し野蛮にテロ化をおこなっていると思像してきました。なぜなら、あなたがたのなかには(ここで私はアメリカ合衆国その他を指しているのですが)、私達の敵に飛行機、爆弾、その他あり

とあらゆる殺人武器を無料で提供している国々がある。彼等は問題の核心を意図的に歪曲し、私達に対して敵意のある位置をとりつけてきました。そしてこれ等は私達の代償の上にはなく、アメリカ人のすなわち私達が友情を持ちつづけたいと願いつづけて、その自由のための闘争の歴史を私達が贅えるところの人々の代償の上になされてきました。

アメリカ人へのアピール

私はこの演壇からアメリカの人々に直接的に、私達の英雄的な、戦いつづける人々への支持を与えてくれるよう要求することなしに去るわけにはいきません。ジョージ・ワシントンが目指したものは、国家の独立と自由でした——貧しい者、呪われた者のチャンピオンであったアブラハム・リンカーン、そしてウイッドロウ・ウィルソンの十四原則は今でも私達の尊敬の的となっています。これ等の人々を思い出し、そして権利と正義というものにもう一度正当な位置を与えてくれるよう心の底から望みます。私はアメリカの人々に、この大議場のそとでおこなわれている敵意はいつたいアメリカの本当の意志をあらわしているのかと聞きたい。パレスチナの人々がいつたいどのような罪をアメリカの人々に対しておこなってきたのでしょうか? いったいなぜあなたたちは戦うのですか? このように正当な理由のない戦闘行為がいつた

いあなたがたの本当の利益になるのでしょうか? アメリカの大衆の利益になるのでしょうか? 否、まったく違います。私はアメリカの人々が全アラブ諸国との友情をこのような状態にしてそれを失わせるには、あまりに大きく、あまりに永続的なものであり、あまりに実のあるものだとということをおぼえてほしいと思えます。

いずれにせよ私達のパレスチナに関する議論が歴史的な根に焦点をあわせるのは、いま世界の注目を浴びている問題は、全てラジカルに(根という本来の意味で)考えなければ、その本当の解決はないと信じるからです。無智、否定、奴隷的な現状への従属のもとで歴史的な根源をくもらせている国際問題へのアプローチへ対立するものとして私はこのラジカルなアプローチを提出したい。

パレスチナ問題の根

パレスチナ問題の根は十九世紀末まで、すなわち私達が植民地主義、移民の時代と呼ぶ時期までさかのぼります。一つの計画としてのシオニズムが生まれたのはまさにこの時期です——その目的はヨーロッパからの移民によるパレスチナの征服であり、それは丁度植民者たちがアフリカの大部を植民地化し、襲撃したのと同じプロセスでした。これは西欧から、あふれ出るようにして植民地主義がアフリカ、アジア、ラテンアメリカのすみずみにまで拡がり、どこでもこの三大陸の人民を野蛮にも搾取し、抑圧し、略奪し、植民地をうちたててきた時代でした。この時代はいまにひきつがれています。この非難すべき存在の明白な事実、南アフリカ、そしてパレスチナでおこなわれている人種主義のなかにはつきりとみることが出来ます。

丁度、アフリカの住民に対する無数の攻撃、略奪、征服

を「文明化と近代化」の使命というアピールで植民地主義とそのデマゴグたちが権威づけたのと同様、シオニストの移民の波も、彼等がパレスチナを征服するにあたってはその真意に仮面をかぶせました。丁度、制度としての植民地主義、そして植民地主義者が「宗教、皮膚の色、人種、言語」をアフリカ人の搾取と、恐怖と差別による残忍な従属化を正当化する道具として使ったのと同様、同じ方法がパレスチナを略奪しパレスチナの人々をその民族の地から追いつたためになされました。

丁度植民地主義が、呪われた、貧しい、搾取されたものを、定着植民地主義をうちたて機能させていくための生命を保持しない部品として分別なく使ったのと同様、窮乏し、抑圧されたヨーロッパのユダヤ人たちは世界帝国主義とシオニスト指導層のために使われました。ヨーロッパのユダヤ人たちは侵略の道具にされてしまいました——彼等は人種主義と固く結びあわされた定着植民地主義の一部となりました。

シオニストの神学が私達パレスチナ人に対して使われました——その目的は西欧型の定着植民地主義の建設にあったばかりでなく、ユダヤ人を彼等の住んでいた地から切り離し、これらの国から疎外させることでもありました。シオニズムは帝国主義的、植民地主義的、人種主義的イデオロギーです。それは非常に深いところで反動的であり差別的なものです。それは退歩的教条という点でアンチ・セミティズム(反ユダヤ主義)と同盟関係にあり、いつてしまえば、同じユダヤ人の裏表であります。なぜならユダヤ教を信じている人間はどこの国に住んでいようとその国に対しては何の義務も持たず、またそこに住んでいる非ユダヤ人と同等の立場に立つことを拒否するということは、それがアンチ・セミティズムと同じ立場に立っているからです。ユダヤ人が今まで歴史的な一





部であったコミュニティーあるいは国から自らを疎外させ、そして移民によって無理やりに他人の土地に定着することにユダヤ人問題を解決する——これはユダヤ人に対してアノチ・セミテイズムをとった人々によって奨励された立場とまさに同じです。

それ故、例えば、ロードによって南西アフリカに進められた定着植民地主義と、ヘルツェルによってパレスチナに計画されたそれとの密接な関係を理解することが出来ます。定着植民者がどう振舞うべきかという卒業証書をロードからうけとったのち、ヘルツェルはそれをイギリス政府に提出し、シオニスト政策を支持する公式の決議を得ようと望んだわけなのです。それと交換にシオニスト達は、帝国主義の利権がその主要な戦略的地点を確保するためパレスチナの地に帝国主義のベースをつくることをイギリスに約束したのです。

シオニスト運動は、私達の土地を共同で襲撃するため世界植民地主義と同盟したのです。この同盟に関する歴史的な事実のいくつかをここで説明したいと思います。

パレスチナ 一八八一—一九四八

ユダヤ人のパレスチナへの侵入は一八八一年に始まった。最初の大きな移民の波が到着し始める以前はパレスチナは五十万の人口を持っており、その殆んどがイスラム教徒かキリスト教徒であって、ユダヤ人の人口は二万を数えるにすぎなかった。人口の各層は、私達の文明の特徴である宗教的寛容を享受していました。

固有の文化を積極的に豊かなものにならなから生活を築いているアラブ人が主な人口であったパレスチナは当時、緑の土地でありました。

一八八二年から一九一七年にかけて、シオニスト運動は約

五万のヨーロッパ系ユダヤ人を私達の土地に定着させました。私達の真ん中に彼等を入植するためには陰謀と欺瞞がつかわれねばなりません。イギリスにバルフォア宣言を出させることに成功したことは、再びシオニズムと帝国主義の同盟を明らかにするものでした。そしてイギリスは、自分のものでないものをシオニスト運動に与えることを約束することにより、いかに帝国主義の法則が抑圧的であるかということを示しました。当時成立しつつあった国際連盟はアラブ人民を見放しにし、ウィルソンの誓いと約束は無効に帰しました。委任統治という仮面をかぶってイギリス帝国主義が残虐にそして直接的に私達の上に押しつけられました。委任統治の国際連盟発行の公式文書は、シオニストの侵入者たちから奪った土地を結束することを可能ならしめたのです。

バルフォア宣言の時から三十年にわたり、シオニスト運動は、帝国主義同盟者と協力してより多くのヨーロッパ系ユダヤ人を定着させ、パレスチナ・アラブ人の土地を略奪することに成功しました。

一九四七年までにはユダヤ人の数は六万に達しました。彼等は耕作可能なパレスチナの土地の六パーセントを所有するにいたりました。(この数字は当時のパレスチナの人口百二十五万に比較されるべきです。)

委任国とシオニスト運動の共謀の結果、そして他の教国の支持を得て、この国連総会はその歴史の初期において、パレスチナの分割の提案を決議しました。

疑うべき行為と強い圧力の邪悪な雰囲気の中でこれがおこなわれました。国連総会は自分が分割する権利を有していないものを分割したのです——すなわち分割不能な民族の土地を。私達がこれを拒否したのは、丁度ソロモン王の裁きの前にせの母親はその「息子」を二つに切ることに賛成した

のに本当の母親は賛成しなかったという立場に似ています。そのうえ分割案は植民地主義定植者に五十四パーセントのパレスチナの土地を与えたのに、それに満足できない彼等はアラブの人々に対して恐怖のテロ戦争を強行しました。彼等はパレスチナ全土の八一パーセントを占拠し、百万のアラブ人を土地から追い払いました。こうして五百二十四のアラブの町や村を占領し、そのうち三百八十五はそのプロセスで破壊し、完全に消去されました。そうすることによって彼等は私達の農地や木立の廃墟の上に彼等のセトルメントやコロニーをうちたてたのです。パレスチナ問題の根はここに存在しています。その原因は、二つの宗教、二つのナショナルリズム間の矛盾に起因するものではありません。それは近隣する二つの国の国境問題でもありません。自分の土地を奪われ、離散させられ、根絶させられようとして、その殆んどが国外に亡命者として、避難民キャンプに生活している人々の問題なのです。

四つの戦争

帝国主義、植民地主義大国の支持を得て、イスラエルは国連の加盟国になることに成功しました。さらに国連の議題からパレスチナ問題を削り、国際世論を、私達の問題を「慈善者からの恵みが必要としており、自分以外の地に定着地を捜している人々の問題」として、欺くことに成功しました。

しかしこれにも満足することが出来ず、帝国主義—植民地主義の概念の上になりたつた人種主義的存在は、彼等自身を帝国主義のベースにして兵器庫へと変えていきました。これが彼等をして、アラブの民衆を従属せしめ、パレスチナの、そしてアラブの他の土地への拡張の野心を満足させるための侵略の役割を可能ならしめました。この存在(イスラエ

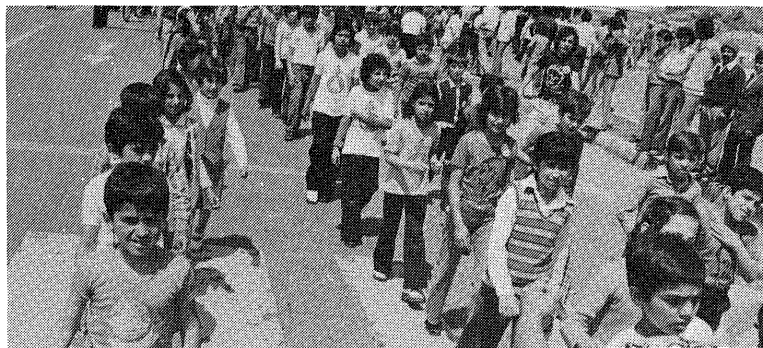
ル)によってアラブの国々に対してなされた多くの侵略の上に、一九五六年と一九六五年には大規模な戦争をしかけて世界の平和と安全に脅威を与えました。

一九六七年六月のシオニストによる侵略の結果、敵はエジプトのシナイ半島をスエズ運河に到るまで占領しました。敵はまたヨルダン以西のパレスチナの土地とともにシリアのゴラン高原も占領しました。これ等全てのなりゆきが私達の地域に「中東問題」として知られる問題をつくりだしたのです。

不法占領、およびさらにそれを固定させようとするに、アラブの国々にかげられた世界帝国主義の橋頭堡となることに固執しようとする敵の態度は、状況をますます深刻なものとしてきました。一九六七年六月に占領した土地から撤退することを世論に呼びかけた、また以後の安全保障理事会での決議は全て無視つづけられてきました。国際レベルの全ての平和的努力にかかわらず、敵はその拡張政策を思いとどまろうとはしていません。アラブの国、主としてエジプトとシリアに残された唯一つの選択の道は、全ての平和的手段が失敗したのちには、野蛮な、軍事的侵略に抵抗するために全ての努力をしいて傾むけることであり、そうすることによってアラブの土地を解放し、パレスチナ人の権利をとりもどすことでありました。

このような状況のもとで一九七三年の十月に第四次戦争がおこり、シオニストの軍事に頼ろうとするその占領、拡張政策は破産するのです。しかしこれ等全てにかかわらず、シオニストの指導者はこの経験から何らの教訓もくみとらなかつた。彼等は再び、軍事的優性、侵略、テロリズム、従属、そして最終的にはアラブとの戦争という言語を駆して、第五次戦争の用意をおこないつつあるのです。





砂漠の神話

「外国人定着者の努力によってその土地に花が咲くまでは、私達の土地は砂漠でありその土地は無人だった」のである。「植民者の存在は誰も傷つかなかった」という神話の宣伝をきくことは私達の民族にとっては大きな苦痛です。そうではありません。このようなウソはこの演壇からはつきりさせなければなりません。なぜならパレスチナはもともと古い文化と文明のゆりかごだったのである。そこに住むアラブ人は土地を耕し、家を建て、数千年のあいだその土地に文化を広げ、信仰の自由の根本を示し、そして全ての宗教の神聖なる地の忠実な保護者として生活してまいりました。エルサレムに生まれた息子として、この神聖な地が悲劇をむかえる以前に象徴としてあった宗教的兄弟愛の生き生きとした美しい記憶を私の民族とともに私は大事にしています。私達の民衆はイスラエル国家が出来、彼等が離散させられるまではこのように開けた政策をとっていました。そしてイスラエルがひとたび成立したとしても私達がパレスチナの地に於る人間的な役割を追求することには変わりはありません。また同時にその土地が侵略のほこ先となり、あるいは文明、文化、進歩、平和の破壊のための人種主義のキャンブとなることも許さないのであります。私達の民衆は、侵入者に抵抗し、生まれた土地アラブの民族国家、文化、文明を守る榮譽ある仕事をひきうけ、一宗教の生まれたゆりかごの地を守るといふ祖先からの遺産をうけつけないわけにはいかないのです。

イスラエルの性質

これと比較してイスラエルの立場について簡単に手短かに述べる必要があります。——そのアルジェリアに於る秘密機

関の支持、あるいはアフリカに於る定着植民地主義の支持（コンゴ、アンゴラ、モザンビーク、ジンバブエ、アザニア、あるいは南アフリカ）、またベトナム革命に敵対する南ベトナムの後押しについて、それにつけ加えて、イスラエルの世界中のどこでも帝国主義者、人種主義者を支持しつづけていることについて言及することが出来ます。——二十四カ国委員会における妨害的立場、アフリカの独立についての投票拒否、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ諸国、その他の国の資源、人口会議、海上法の会議、食糧会議での要求に対する反対、これ等全てが私達の土地を略奪した敵の性質についてのさらにはつきりとした証明です。これ等は私達が敵に対して戦っている榮譽ある戦いを正当化します。私達が未来へのヴィジョンを守るのに対して、私達の敵は過去の神話をかかげます。

私達の直面している敵はユダヤ人自身に対しても長い敵対的なレコードをもっています。なぜならシオニストの存在自体のなかにくみこまれていた東洋系ユダヤ人に対する人種差別があるからです。私達は声をあげて、ナチ支配のもとでのユダヤ人虐殺を非難するものですが、シオニストの指導者はパレスチナへの移民の目標を「ユダヤ人虐殺の歴史」を出来るかぎり利用して達成することに興味をもっているように見えます。

もしもユダヤ人のパレスチナへの移民が、その目標として、私達と共存して生活し、同じ権利、同じ義務を享受することを可能ならしめようとするものであったなら、私達は私達の土地を受け入れることが出来るだけ彼等のために喜んでドアをあけたでしょう。それが今も私達と同等に市民として兄弟として住んでいるアルメニア人やシールカシア人の場合でした。しかし移民の目標が私達の土地を略奪し、私達



を二等市民にすることであれば、私達がそれに黙って従うということは誰も要求することが出来ないでしょう。それ故、私達の革命は最初から人種的、あるいは宗教的なものによって動機づけられたものではありませんでした。その目標は決して人間としてのユダヤ人ではなく、人種主義的シオニズムであり、また仮面をかぶらない侵略であったのです。この意味で私達の革命は人間としてのユダヤ人にとっての革命でもありません。私達はユダヤ人、キリスト教徒、イスラム教徒が、平等に、同じ権利を享受し、同じ義務をひきうけ、人種的宗教的差別から自由になるために闘っているのです。

ユダヤ主義対シオニズム

私達はユダヤ主義とシオニズムを区別します。植民地主義シオニズムに反対する一方で私達はユダヤ教の信仰は尊重します。今、シオニズム運動がおこって一世紀ののち、私達は世界中のユダヤ人にとって、アラブの民衆にとって、世界の平和と安全にとってのシオニズムのより増大する危機について警告したいと思えます。なぜならシオニズムはユダヤ人が生まれた土地から移住して、人工的につくられた国籍をもつことを奨励します。シオニストは、その結果はあまり私達にとって効果的ではなかったとしても、テロ活動をおこなってきました。イスラエルからのたえまない移民（たとえイスラエルが植民地主義と人種主義の稜堡としては増大するとしても）は、このような活動の失敗の不可避性の例です。

私達は世界の人々、政府が、世界のユダヤ人をシオニスト達が移住させて私達の土地を略奪することに対して強い態度をとることを要求します。私達はまた、宗教、人種、皮膚の色にもとづく、どのような人間に対する差別にも強く反対することを要求します。

どうしてパレスチナのアラブ人が世界のそのような差別の代償を払わなければならないのでしょうか？ もしもそのような問題がある人々の心のなかに存在するとすれば、なぜ私達の民衆がユダヤ人移民に責任をもたなければならないのでしょうか？ そのような問題に頭を悩まし、ユダヤ人の移民を支持している人々がなぜ自らの国を開けて、その問題を解決しこれ等の移民を助けないのでありましょうか。

革命家対テロリスト

私達をテロリストと呼ぶ人達は、世論が私達についての事実を発見し、私達の顔に正義を見ることを妨げようと欲しています。彼等の行為であるテロリズムと暴力政治、そして私達の自衛の立地を隠そうとしています。

革命家とテロリストの違いは何のために戦っているかという理由にあります。なぜなら正しい目的のためにそして自身自身の土地を侵入者、植民者、植民地主義者から解放し、自由なものにしようとしているものは決してテロリストと呼ばれることは出来ません。さもなければ、イギリス植民地主義者からの解放のために戦ったアメリカ人はテロリストになりません。ヨーロッパに於るナチに対するレジスタンスはテロリズムになります。アジア、アフリカ、ラテンアメリカの人々の闘争もテロリズムということになるでしょう。そしてこの総会場におられる数多くの人々もテロリストということになるでしょう。私達の戦いは国連憲章に、また世界人権宣言にのっとった正しい適正な戦いであり、正しい目的に敵対して、占領のため、植民のため、他民族を圧迫するため戦うべきで、彼等は戦争犯罪者と呼ばれるべきです。なぜなら目的の正しさが戦う権利を決定するからです。



パレスチナの人々の土地を略奪し、人々を土地から追い出すというシオニストのテロリズムは私達の公式記録に登録されています。数千の人々が彼等の村や町で暗殺されました。数万の人々が銃口によって、自分の家、父祖の地から強制的に追いたてられました。何度も何度も私達の子供、女、老いた者たちは追いたてられ、砂漠を、山を、食糧や水なしにさまよわなければなりませんでした。

一九四八年に数百の町や村——ジアフア、リツダ、ラルムやガリー——の住民の上に降ってわいた悲劇を目撃した人々は誰も決してその経験を忘れないでしょう。たとえ当時破壊され、完全に地図の上から消去された三百八十五のパレスチナの村や町のとおり、報道管制がこれ等の恐怖を完全に隠すことに成功したとしても。過去七年間に於ける一万九千戸の家屋の破壊はパレスチナのさらに二百の村の完全な破壊にみあうものであり、またイスラエルの牢獄での扱いにより役に立たなくなった多くの人々など、これ等全ては報道規制によっても隠しおおくは出来ません。

彼等のテロリズムは憎しみを生み、その憎しみは、私達の土地のオリブの木にまで向けられました。(オリブの木は私達の誇りのシンボルであり、それは彼等にそこ以前から住んでいた住民を思いださせる。すなわちその土地はパレスチナだと思いださせる生きた証拠だったので)彼等はそれも破壊しようとしてきました。ゴルダ・メイヤーが「パレスチナの子供が毎日生まれている」ことに関する不安を表明したことについては私達は何と言ったらよいのでしょうか。彼等はパレスチナの子供の、そしてパレスチナの木をなかに彼等の全滅すべき敵を見ているのです。数十年のあいだシオニストは、私達民衆の文化的、政治的、社会的指導者を脅迫し、テロ活動をおこない、暗殺しつづけてきました。彼等に私達

の文化的遺産、民衆の伝承を盗み、それを彼等のものだと主張しつづけてきました。彼等のテロリズムは、私達に愛されている平和なエルサレム、私達の神聖な場所まで達しました。彼等はそれを非アラブ化しようとし、そのイスラム的、キリスト教的性格を、住民を追い出して併合することにより失われようとしてきました。

私はまた、歴史的及び宗教的性格を持った多くの記念物の破壊、アクサ寺院の火事についても触れなければなりません。宗教的歴史、精神的価値を有するエルサレムは将来を目撃するでありましょう。それは、私達の永遠の存在、私達の文化、私達の人間の価値の証拠であります。ですからその空のもとで三つの宗教が生まれ、その三つの宗教が人類の希望と貢献を表現するため人類を啓発せしめんと光を発つこと、そしてそれが未来へ希望とともに道を切り開かんとすることは驚くにあたらないことです。

三等市民としてパレスチナ人

一九四八年シオニストによって追いたてられることからまぬがれることの出来た少数のパレスチナ・アラブ人は現在自分の生まれた土地に避難民として存在しています。イスラエルの法律は彼等を二等市民(東洋系ユダヤ人がすでに二等市民であれば、三等市民)としてあつかい、彼等は土地財産をとりあげられたのち、あらゆる種類の人種差別とテロリズムに直面しています。これ等の人々はたとえクファールカツシムの血に塗られた虐殺の犠牲者であり、またたとえイタリットとクファール・プリムの住人のように村を追われ、そこへ帰る権利を拒否されました。二十六年間のあいだ、私達の民衆は戒厳令のもとにあり、イスラエルの軍総督からの事前の許可なしに移動することも許されないような状態にあり

ました。そしてこれは私達の土地に移住しようと望む世界中のユダヤ人に市民権を与えるというイスラエルの法律が成立するのと同時になされていたのです。そのうえ、イスラエルのもう一つの法律は、占領されたとき自分の村あるいは町に居なかつたパレスチナ人には市民権を与えないということを作成しました。

シナイ半島とゴラン高原に占領下で残った私達の民衆に、イスラエルの支配者はテロ行為で満たされた記録を残しました。パール・アカ・パークの学校、アブ・ザバールの工場になされた罪深い爆撃はその忘れることのできないテロ行為の一例にすぎません。シリアの都市クネイトラの完全な破壊はもう一つの組織的テロ行為の明確な例です。もしもレバノン南部に於けるシオニストのテロリズムが完全に報告されるとしたら、もつとも固い心をもった人も、その行為にショックをうけるでしょう。(盗賊行為、空爆、焦土作戦、数百の家々の破壊、非戦闘員の追いつて、レバノン人の誘拐、etc) これ等は明らかにレバノンの主権の侵害であります。

アラブの国々に対してなされたイスラエルの侵略を非難するこの総会で何回もされた決議、イスラエルの人権侵害、ジュネーブ協定の侵害、エルサレム併合に関してそれを無効にする決議、これ等をここで思い出す必要があるでしょうか。

これ等の行為の唯一の形容は、それらが野蛮行為でありテロリズムだということです。しかし、シオニスト人種主義者と植民地主義者は大胆にも私達の正しい闘いをテロと呼びます。これ以上うざうざしい事実の歪曲があるでしょうか。私達の土地を略奪し、テロの殺人行為を私達の民衆におこなってきた者たち、南アフリカの人種主義者たちよりもひどい人種差別を私達の民衆に対しておこなってきた者たち、私達はこれ等の者には南アフリカ政府の国連でのメンバーシップが



一年間停止されたということ覚えていてほしい。ジャングルの法律を行使し、他人の土地を略奪し、永続的な抑圧をおこなう人種国家にとってはそれが不可避的な運命だということとを。

過去三十年にわたり、私達の民衆は、そのどちらもが唯一の目的として私達の土地の略奪をめざすイギリスによる占領およびシオニストの侵略に対して戦いつづければなりませんでした。私達の土地が私達のものでありつづけるため、六つの大きな反乱、数十の民衆による蜂起がこれ等の試みに対してなされました。三万以上の殉教者(これは総人口の比較からすれば六百万のアメリカ人口にあたります)がこの過程で死んでいきました。

一九四八年以後の闘争

パレスチナ民衆の大部分が一九四八年にその土地から追われたとき、パレスチナの民族自決の闘争は、もつとも困難な状況のなかでつづけられました。私達の民族の権利を得るため、私達の政治的闘争をつづけるための可能なかぎりの手段が試みられましたが、それは無効に帰しました。その間私達は単なる生存のため苦闘しつづける必要ありませんでした。亡命のもとでも私達は子供の教育におこないませんでした。これらは全て生存のための努力の一部だったので。

略奪された土地に国境を接するアラブの国の発展に積極的に参加した数千の医者、法律家、教師、科学者をパレスチナ人たちはつくりだしました。彼等はその収入を、避難民キャンプに残っている人々のなかの年老いた者、幼い者を助けるために使ってきました。彼等は、妹や弟を教育し、両親を助け、子供達の面倒をみてきました。これ等は全てパレスチナ人の自分の土地へ戻る夢にそっておこなわれてきたのです。



パレスチナ人のパレスチナに対する忠誠、パレスチナに戻る決心は決して弱まりませんでした。時の経過は、誰かが望んだように彼等をしてこれ等全てを忘れさせませんでした。私達の権利を無視することに固執する国際社会に私達もはや信頼しなくなった時、あるいは政治的な手段ではインテもその土地を奪い返すことができないとはつきりしたとき、私達の民衆にとっては武装闘争に頼る以外の選択はありませんでした。その闘争のなかに全ての物質的、人間的資源がそそぎこまれました。私達の闘争の道をそらし、それを捕獲しようとするイスラエルのもつとも邪悪なテロリズムに対して私達は勇敢に直面しました。

過去十年間の闘争のなかで、数千の殉教者、その倍に匹敵する負傷者、不具になったもの、投獄されたものは全て、私達を根こそぎにしようとする日々を脅迫に抵抗し、私達が自決権を得て私達の民族の地へ戻るためになされた犠牲なのです。高い誇りと、賞賛すべき革命精神をもって、イスラエルの牢獄のなかでも強制収容所のなかでも、あるいはすべての脅しと抑圧のなかでも、パレスチナの人々はその精神を失いませんでした。彼等は生存のために苦闘し、その地のアラブの性格を守るために戦いつづけます。こうして抑圧、暴力政治、テロリズムのもつとも醜い形態に抵抗しつづけます。

パレスチナ解放機構

私達の政治的指導者、民族的諸機関が民族解放闘争に結晶し、全てのパレスチナの分派、機関、能力を含み、パレスチナ解放機構（PLO）が現実化したのは、民衆による武力闘争をつうじてでした。

戦闘的なパレスチナ民族解放運動をつうじ、武装闘争に加えて、政治闘争、社会闘争を持つに充分に私達の闘争は成熟は強められました。ここで私は、私達の革命的戦士、そして私達の民衆からの、非同盟諸国、社会主義諸国、イスラム諸国、アフリカ諸国、ヨーロッパ友好諸国、そしてアジア、アフリカ、ラテンアメリカの全ての友人にお礼の言葉を伝えなければなりません。パレスチナ解放機構（PLO）は、合法的にそして単独で、パレスチナ人民を代表します。それ故、PLOはその人民の希望と願いを表現しているのです。それ故にまた、PLOはその願いと希望を皆さん方の前にもつてきて、そして重大な歴史的責任を避けてとおらぬように要求しているのです。

長いあいだ私達の民衆は、戦争による荒廃、破壊、離散の運命にさらされてきました。私達の民衆は決して代償することの出来ないその息子たちの血でそれに支払いをしてきました。どの民衆よりも、絶えることなく、占領、離散、立ちのきの重荷を背負ってきました。にもかかわらずこれら全ては、私達の民衆を執念深く、復讐心に燃えた民衆にはしませんでした。それはまた私達をして敵に対する人種主義にかりたせはしませんでした。そしてまた私達をして友人と敵を見定める本当の方法を失わせませんでした。

なぜなら私達はユダヤ人に対してなされた全ての罪を憎むからです。——そしてまた信仰の違いからなされる全ての真実の差別を憎むからです。

反抗者

私は反抗者であり、自由が私の目標です。ここに今日いる多くの人々のなかには、私がいま戦わなければならないのと同じ、抵抗の立場にたったことがある人々がいるはずで

しました。現在の挑戦にパレスチナ人を動員するだけに満足せず、PLOは将来の私達のパレスチナを型づくる資質をもった新しいパレスチナの間人をつくりだす、もつとも大きな要素でした。

武装闘争に従事し、シオニストのテロリズムの邪悪な攻撃に直面しているにもかかわらず、多くの文化的、活動また教育活動をおこなっていることをPLOは誇りにすることが出来ます。私達は科学調査、農業開発、社会福祉の研究所をたてましたし、文化的遺産の再生センター、民俗文化保存のセンターもつくりました。多くのパレスチナの詩人、芸術家、作家はアラブの文化を豊かなものにし、世界の文化に貢献しました。彼等の非常に人間的な作品はそれを知る人々の賞賛をかちとりました。それに対し、私達の敵は私達の文化を組織的に破壊し、進歩、正義、民主主義、平和を妨げる人種主義、帝国主義イデオロギーの種を蒔いています。

PLOはその前進的役割に内包されている犠牲、そして敵身的な指導者によってその合法性を得ました。またその方針に賛成し、PLOが闘争を指導することをえらんだパレスチナの大衆によりその合法性を与えられました。またPLOは全ての党、分派、グループあるいはパレスチナのタレント（有能者）をその国民会議、あるいは人民の機関に代表することにより合法性を得ました。この合法性はアラブ諸国全体の支持によりさらに強められ、先のアラブ首脳会議において、PLOはパレスチナ人民唯一の代表であり、パレスチナの解放された領土に独立民族国家をつくる権利を持つと認められました。

その上、他の解放運動によって与えられた、支持、また私達の側に立つ友好的な志を同じくする、私達を励まし、私達の民族の権利を得ることを援助する国々により、その合法性あなたたちは闘争によって自分の夢を現実化しなければならなかった。ですからあなたがたは今、私の夢を共有しなければならぬ。それが今、私があるがたに助けをお願いしている理由だと思ふのです。一緒に、夢を輝く現実にする——パレスチナの神聖な土地のうえに平和な将来をうちたてるという共通の夢を共有してください。

イスラエルの軍事法廷に立つてユダヤ人の革命家アブド・アディフはいいました。「私はテロリストではない。私はこの地に民主的な国家が建てられることを望むものだ。」アディフは今シオニストの牢獄のなかで、彼と信念を共有するものたちと一緒に苦しんでいます。彼と彼の同僚たちに私は心からの敬意を送りたい。

そしてその同じ法廷に、今は、教会の勇敢かつ気高い人、カプシコ教が立っています。私達の自由の戦士が使うのと同じ勝利のサインのVの指をあげてつくりながら彼はいいました。「私がしたことは、この平和の地に、人々が平和に生活できるようにするためにしたのだ。」この気高い牧師も疑いなくアディフと同じ、きびしい運命を共有するでしょう。彼に對しても心からの敬意とあいさつを送りたい。

ですから、なぜ私は夢をもつたり希望をもつたりすべきでないでしょうか？ 夢や希望を現実にするのは革命ではないでしょうか？ ですから私の夢が現実となり、私たちの民衆とともに亡命からパレスチナに帰り、ユダヤ人の自由の戦士とその仲間、アラブ人の司教とその兄弟たちとともに、キリスト教徒も、ユダヤ教徒も、イスラム教徒も、正義と、平等と兄弟愛と進歩のなかで一緒に生活する民主的な国家のなかで、生活できるようになるよう、一緒に協力しようではありませんか。

これは全ての自由を愛する人々の闘争と並んでの苦難に値



アラファト物語

The Story of the Chairman Arafat

生い立ちと足跡……



何の飾りも、気どりの誇張も好まないアラファト議長の知られざるエピソードの数々——。やがてエジプトのナセル大統領(前)やシリアのアサド大統領との思わぬ出会いの秘話が語られてゆく。

「いよいよ、アブ・アンマール(アラファト議長)の親称)のエピソードをお話しする時が来ましたね。クロードさん」
ハダウェイ氏は、翌朝早く、応接室で待ちかまえていた「ル・モンド」の特派員のクロード氏に、笑顔で話しかけた。クロード氏は、期待に眼を輝かせ、愛用のパイプを持つ手が、かすかにふるえるのを隠しきれなかった。
レバノンでは、一九六五年の当時でも、パレスチナ人ジャーナリストが報道の世界でめざましい活躍ぶりを見せていた。暗殺されたガッサン・カナファアーニがベイルートで活躍していたし、アルフワール氏も、パレスチナ作家を代表する著名な人物であった。多くのパレスチナ人ジャーナリストは、レバノンの進歩的な新聞社で働いていたし、また作家たちは、アルリアタブ(文学)などの雑誌を舞台に作品を発表していた。
ハダウェイ氏は、ベイルートとダマスカスで活躍していたパレスチナ人ジャーナリストの中でも、指導的な立場にあって、多くの作家や詩人たちの中にも、友人を持つていた彼は、フランス人ジャーナリストの訪問を受けてから、あらためて友人たちにアブ・アンマールのエピソードを寄せるよう頼んでいたのだ。ハダウェイ氏は、一言だけ前置きした後で、

「このエピソードを、まるで、それぞれの場に彼自身が居合わせたかのように、なつかしさと愛情を表情にあらわしながら語り始めた。
「これらのエピソードについては、誰れが語ったかまでは、明らかにしたくないのです。もちろん、中には誰れからともなく語りつがれて、今日では、パレスチナ人の誰れもが知っているエピソードとなっているものもありますが、それはアブ・アンマールが何度も強調しているように、個人崇拜の対象となっていないという点を意味するものではないのです」
ハダウェイ氏は、想い出の糸をたぐるように語り始めた。
注: ガッサン・カナファアーニ、パレスチナを代表する現代作家(一九二一年—一九七二年)。作家活動をつづけたが、ジャーナリストとしてPFLP(パレスチナ解放人民戦線)のスポークスマン、「アルハダフ」誌の編集長としてパレスチナの現実を世界に訴えつづけたが、一九七二年七月八日、イスラエルのモサドによりベイルートで暗殺された。日本でも彼の作品集「太陽の男たち/ハイフ」に、つづてが河出書房新社から出ており、多くの読者をもっている。

気どりのない人間

アブ・アンマールは、自ら指導者となつたというよりは、この世代——失意から解放をめざした世代の指導者たちの全てが指導者として名のり出ることを遠慮



いする高貴な夢だとは思いませんか? これはパレスチナ、平和の地、犠牲者の地、英雄の地、歴史の地の夢であります。

ヨーロッパとアメリカのユダヤ人は教育宗教分離主義の、また国家と教会の分離のための闘争の先頭に立ったことを思い出してほしい。また彼等は宗教上差別に対する戦いでも知られていきます。なほもつとも教信的、差別主義的で、もつとも閉ざされた政策をもつ国家を支持しつづけることが出来るのでしょうか。

パレスチナの将来

パレスチナ解放機構(PLO)の議長という正式の立場から、またパレスチナ革命の指導者として私はここで次のことを宣言したい。すなわちあすのパレスチナについて共通の希望を私が述べるとき、その展望は今パレスチナに住んでいるユダヤ人、私達と平和に人種的差別なしに住むことを望むユダヤ人もそのなかに含めていっているのです。

パレスチナ解放機構の議長という正式の立場からしてパレスチナ革命の指導者として、シオニストのイデオロギーおよびイスラエル指導者によってなされた仮空の約束から、ユダヤ人、一人一人が解きはなされることを呼びかけます。彼等はユダヤ人に永遠の流血と、終わることのない戦争、奴隷の位置を与えようとしているのです。

私達は彼等が精神的孤立から、現在の指導者が植えるこもろつと自由の選択を持ち、より開かれた領域へと向かうよう呼びかけます。

私達はもつとも開かれた解決法を申したい。すなわち私達は民主的なパレスチナのもとで、正義にかなった平和のな

かで、一緒に住むだろうということ。

パレスチナ解放機構の議長という正式の立場から、私はアラブ人の血も、ユダヤ人の血も一滴もたらずことを望まないということを宣言したい。私達はまた殺人が継続することも望まない。これ等のものはひとたび、人民の権利、望み、向上心にもとづいた正義にかなった平和が、うちたてられれば終わりをみるでありましょう。

パレスチナ解放機構の議長としてパレスチナ革命の指導者として、私は私達の民族自決権を得るための戦いに参加するよう呼びかけます。この権利は国連憲章に含まれており、憲章が起草されてから幾度もこの総会の決議にあらわれませんでした。私はまた武力、恐怖政治、抑圧によって私達に無理やりにしいられた亡命から、私達が私達の財産、土地を得て、私達の民族の地、自由で、主権をもつたすべての国家としての権利を享受できるように地に住むことが出来るよう私達の土地に帰ることを援助して下さるよう再びアビールします。そうして初めてパレスチナの創造性が人類の奉仕への力に結集することが出来るであります。そうして初めて、私達のエルサレムはその歴史的な役割、全ての宗教の平和な殿堂としての役割をとりもどすでありましょう。

私は、私達の民衆が、自分自身の土地の上に独立した主権をうちたてることを可能にしてくださいようアビールします。

今日私はオリーブの枝と自由の戦士の銃をもってやってきました。どうかオリーブの枝を私の手から落とさせないでください。くりかえします。どうかオリーブの枝を私の手から落とさせないでください。

戦火はパレスチナの地に燃えあがります。しかし平和が生まれるのはパレスチナです。

のために、ためらっていたために、あえて説得されてファタハ（パレスチナ民族解放運動）のスポークスマンとして名乗り出たわけだ。

多くのパレスチナ人たちの間でも、アブ・アンマールという名前の指導者がいることを知ってはいましたが、その顔を身近に知っている人は、少なかったわけです。アブ・アンマールは、ごく普通の人間です。何の飾りも、気どりの誇張も彼は好まないのです。

ダマスカスで、ある新聞社の編集長をしていた私の親しいジャーナリストの友人をアブ・アンマールが訪ねた時、受付で、編集長の〇〇に会いたいと面会を申し入れたそうです。受付のスタッフは、編集長は、いま来客中ですからお待ち下さい、と告げると、アブ・アンマールは、ロビーの椅子にどっかとお腰を下ろして待ったそうです。やがて二時間ほどたつたから、その編集長が訪問客といっしょに



ロビーに降りてくると、そこにアブ・アンマールが、アブ・ジハドと共にいるではないですか。」どうしたんですか、お二人おそろいで？」と尋ねると「君に会いに来たんだ」と言つて、二時間も待たされたことなど、まるでなかったかのよう

に笑つた、というのです。つまり「オレはアブ・アンマールだぞ」と受付に言つておけば、待つこともなかったのに、彼は、そういうタイプの人間ではないのです。受付の娘さんは、この人が誰れであるかを知つて驚いてしまい、責任を感じて、その場に立ちつくしてしまいました。

これに似た話は沢山あります。

カイロでのことでした。ナセルとの関係がある程度は確立させてからの頃だつたと思いますが、アブ・アンマールは、私の友人の親戚の学生の宿に二週間ほど寄宿していました。あるエジプト人の老婦人が、この学生に小さな部屋を貸し、食事の世話もしていました。息子を失つた老婦人は、このパレスチナ学生をわが子のように愛していたようです。

ある日、一人の見知らぬ男が寄宿してきたのですが、ベッド一つ、小さな机が一つの小さな部屋です。どちらがベッドに寝るかで口論があり、アブ・アンマール

ルは、床に寝ると言い張つたのです。

翌朝、老婦人が朝のコーヒーを持って部屋に入ると、見知らぬ男が床に横たわつていたわけだ。その学生は、朝早く大学に向かつたため、ヒゲ面の男だけが部屋に残されたのです。老婦人は、この男のために朝食をつくつてあげたのですが、見知らぬ男だから、ありあわせの材料でいいだろうと、骨などもまじつた、おそまつな食事を用意したわけだ。

ところが、一週間後に、カイロの新聞の一面のトップにデカデカと載っている写真を見て、この老婦人は、腰を抜かさ



アラファト議長のスナップより。(1981年1月、革命16周年を迎えて演説するアラファト議長)

ヒゲの男がナセル大統領と握手しているのです。老夫人は、泣きながら、学生のところへ飛びこんできたのです。

「まあ、わたしどうしましょう。あの方に会わず顔がないわ。どう、おわびすればよろしいのかしら」学生は、老婦人の衝撃の理由がはじめてわかつたのです。

「あなたの下男かと思つたのでろくなくとも食へさせなかつたよ。あーあどうしよう。あんなにお偉い方だということがわかつてさえたいたら、せめて……」

アブ・アンマールがナセル大統領と会った翌朝、老婦人は、非礼をお詫びしますと言つて、何度も何度もアブ・アンマールの手をとつては、謝罪したそうです。アブ・アンマールは、そんなタイプの人間なのです。

ナセルと会つた日

ナセルが大統領になってから初めてアブ・アンマールと正式に会見した時は、それはそれは、大変なものでした。ファタハが、パレスチナ人による解放組織であることは知っていましたが、エジプトの秘密警察にしても、その運動体の指導者と会見させてよいかどうかについては、大変な神経を使つていました。ファタハのメンバーで、カイロで活躍していたパレスチナ学生総同盟の学生たちの部屋も

何度か捜索を受けました。最初の分析によると、ファタハがイスラム同志会注とつながりがあるとか、サウジアラビアのモスレム・ファンダメンタリストの資金援助を受けているとか、イスラムの解放運動とつながりがあるとの結論でした。

その根拠は実に単純なのですが、学生総同盟のリーダーの一人の部屋で、一枚の包み紙が発見されたためです。つまり、アラビア語では、シリア（スリーア）とサウジアラビア（サウディーア）は語尾が全く同じです。上の部分が切れていたために、これを証拠に警察側は、サウジアラビアと読み違い、支援の品物が送られてきたものと判断したのです。もちろん、これ以外にも、サウジアラビアとの結びつきを結論づけられると思われた証拠はあつたわけですが……。

そこで、そうした疑惑を解くために、エジプトの著述家のモハメド・ハッサン・ハイカル氏がナセル大統領や側近筋との間に入って、大きな役割を果たしたのですが、とにかく、会見の日が近づいてきました。エジプト政府側では、入国や警護の問題があるため、早急にアブ・アンマール一行の入国について便名や随行員の名簿やパスポート番号などを知らせるようにと厳しく言つてきたのです。パレスチナ側からは、一切を手配してある

ので、心配ないと言つても、エジプトの当局者たちは、きき入れなかつたわけだ。とにかく、会見の日がやってきて、予定の時間が迫ってきました。政府関係者は、どこからどうしてアブ・アンマールがやってくるのか最後の瞬間まで知らずにいました。約束の時間の五分前に、大統領官邸の前に小さな人垣が出来ると、何と、そこにアブ・アンマールが何人かの随員を従えて立っているではありませんか。政府の関係者たちは、度胆を抜かれてしまいました。

ナセル大統領と会見する前に、エジプトの警護責任者は、腰のピストルを外すようにと要請したのに対し、アブ・アンマールは外せないと、これを拒否し、ナセルもこのことを了解したうえで、最初の公式会見におよんだのです。

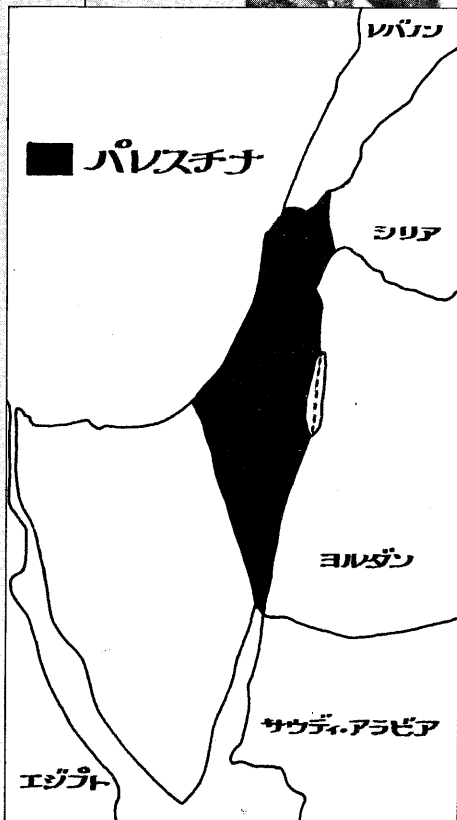
このエピソードも、単に身辺の安全のためだけというところではなく、すべて誇張や格式張つたことを好まない、アブ・アンマールの一面を物語るエピソードでしょう。

注 イスラム同盟会 一九一九年にエジプトにおつた超右翼的なイスラム教社会運動 一九四〇年代に、イスラム教を基盤に、アラビズムを掲げて高揚期を迎えた。ムスリム同盟とも呼ばれている。一九五〇年代には、バース党（アラブ復興社会党）とナセル主義が、これに代つてかわつた。

夢見る獅子たち

アルジェリアは、政府も人民も一体となってパレスチナ解放を支援してしまつた。ベンベラ大統領時代からで、アルジェリア革命に、直接かかわりをもつたパレスチナ人も少なくなつたわけですが、その後は、ナセル大統領との公式会見が実施してからは、エジプトとの関係は、ますます前進して来ています。

シリアとの関係では、正直に言ひまじつて、大変に苦い経験をしています。アブ・アンマールも、シリア政府当局により二回も投獄されています。一つには、治安当局がパレスチナ人たちの自立した運動に対して信頼が持たず、パレスチナ人たちの動きを、完全にコントロールしようとしたためです。つまり、シリア国内の政党や運動の内部に封じ込めてしまおうとしたために、パレスチナ人の内部に、シリア国内の政治的潮流の対立もからみ、問題は複雑でした。そんな背景のある中で、シリア軍の内部のパレスチナ人将校を殺す必要が生じたのですが、シリア政府は、軍の内部で彼を殺しておいて、アブ・アンマールとアブ・ジハドが殺害したと言ひふらして、二人を拉致したのでした。



パレスチナの少女に襲いかかるイスラエルの兵士。
少女の髪をわしづかみにして暴行を加える兵士はシオニスト＝イスラエルであり、少女はパレスチナそのものに見えてくる。



将軍がアサド大統領に嘆願書を提出して、アブ・アンマールは、パレスチナ解放に必要な人間ですから釈放してほしい、と要請した時、アサド大統領は、「アブ・アンマールとは何者なのかね。いずれにしても、大した人物ではないではないか。最近、あちこちに出没している小さな一味の親分に過ぎない男を、特別あつかいする理由がどこにあるのかね。パレスチナ革命だとか、パレスチナ解放とか叫んでいるようだが、ほんとうに可能なかね。わがシリア政府やシリア軍より強力な力をもっているとも言うのかね」と一笑に付したそうです……



ナセル大統領とアラファト(1971年ヨルダン内戦停止の調印式)

ここで若干の説明を加えておきたい。一九六五年頃に、アサド大統領が、それだけの認識しか持っていなかったことは、信じ難いことも知れない。そのアサド大統領ご自身が、昨(一九八〇)年の五月の下旬に、ダマスカスでファタハの第四回大会(注)を開催した時に、大会の会場を訪れ、パレスチナ革命の戦士たちを激励し、更にレセプションに全参加者を招いていることを、ここに付記しておくことは意味のあることである。

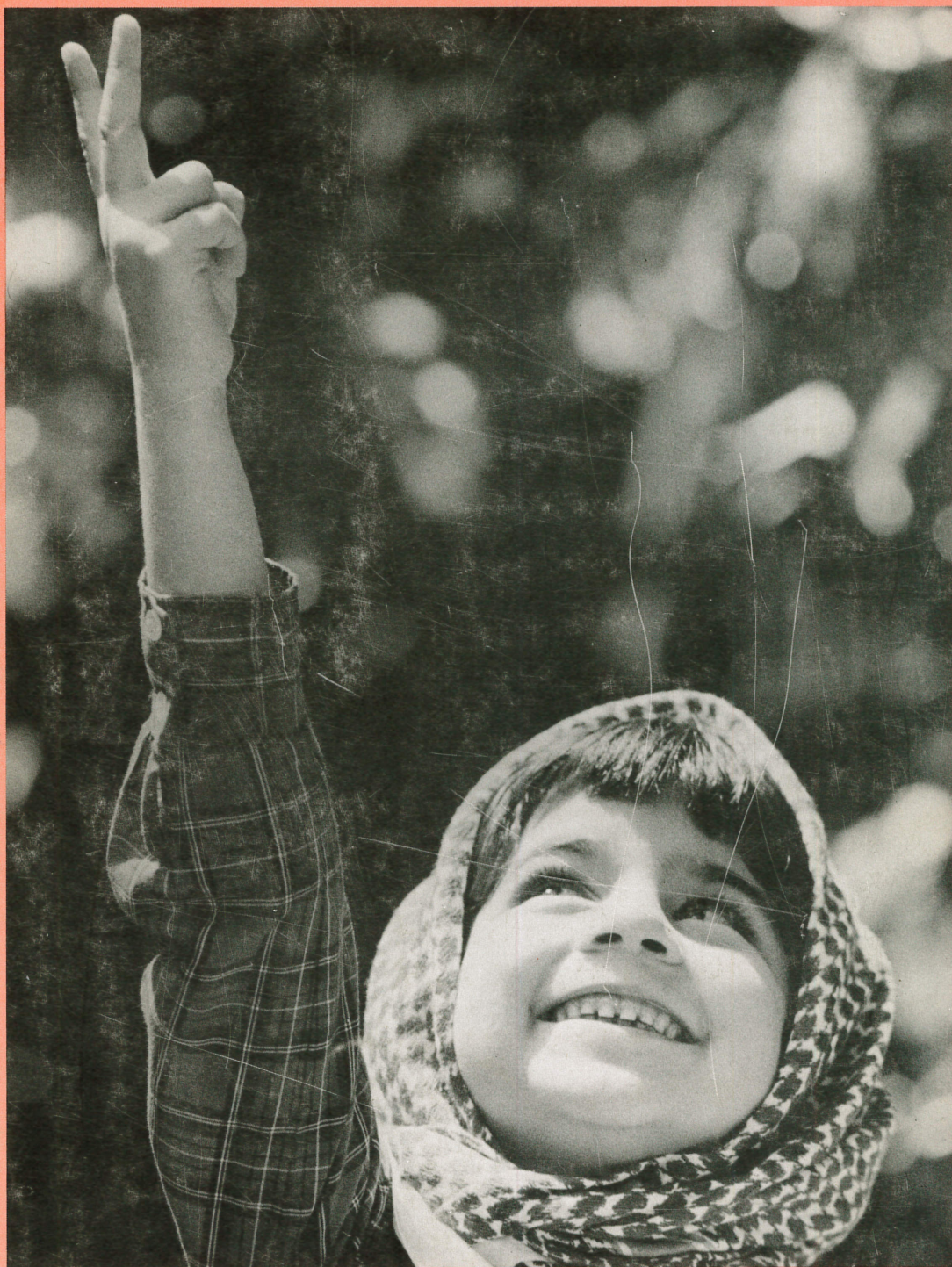
この事実はまだ、アラファト議長が、昨年九月に日本のテレビとのインタビューで強調している言葉の重みをいっそう大きいものにしてしている。「おそれ早かれ、エジプトの夜明けは必ずやってくるものと確信している。このことでは全く心配していない。私は自由の戦士であるが、歴史の流れと共にあるからである。しかも歴史の流れが読める者は、自ら語らずに歴史自らに語らせてきた。実践が何よりも雄弁だからである。」(本誌No.13・昨年12月号、79頁)

歴史の流れともにあるとの実感が、一九六五年の初頭の頃、アラファト議長や指導者たちの内面にどれだけ定着していたかは、想像の範囲を越えるものがあるわけではない。だが、パレスチナ革命のリーダーたちの内面にあるものは、アラブのあれこれの政権や政党は、パレスチナ解放には無力であることが、まさに二十年ほどの動きの中で、まさに歴史的に証明されていた。何とかして、自力でパレスチナを解放しなければならぬ。

その願いを、あらゆる意味で代表し、体現できるのだという期待を担ったのが、ファタハの主要な指導者たちであった。しかし、この一九六五年の初頭に、パレスチナの知識人たちはこの問題をどう考えていたかと言え、それはきわめて悲観的な結論しか出なかった。パレスチナ人たちが自立的な解放への歩みを始めたとは言え、それが、あれこれのアラブ諸政党はもとより、対峙しているシオニズムと、更にそれを支援している帝国主義という巨大な勢力の複雑な陰謀や分断政策、それにも増して、日々の生存を確立してゆくうえで決定的な厳しい条件となるイスラエルの侵略と爆撃などを考えると、パレスチナ解放は、まだまだ彼方の夢であった。

だが、夢みる獅子たちの群れは、たちあがって、その歩みを始めたのだ。祖国へ帰還する日の夢を捨てない、ドリームーの前進はつづいた。アラファト議長は、たえず、その進軍の隊列の先頭にあつたのだ。

注 フアタハ第四回大会 昨年、五月二十一日から六月一日まで九年ぶりにシリアのダマスカスで開かれ、新政治綱領を採決した。政治、外交、軍事の三つの領域におけるたたかいを結合して発展させてゆく方針を再確認した歴史的な大会となった。



● 踏みじられた希望の中から／盗まれた微笑の中から／子どもたちは微笑む／破壊と拷問の中から／血のこびりついた壁の中から／生命は きつと芽生えてくる……／「ファドワ・トウカン」の詩パレスチナよ、永久にあれより

フィラステイン・びらーでいアラファト議長来日記念臨時増刊号 1981年10月10日発行

編集発行人／ファトヒ・アブドルハミード

発行所／PLO駐日代表部

〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 Tel. (03)463-2840

印刷所／株式会社 太平印刷社

FILASTIN BILADI Oct. 1981 No. 23

Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director

PLO Office, Japan; TELEX: J 27524 FATHI

1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153

●購読料、支援金のお振込みは三和銀行渋谷支店 普通預金口座 345-125793 口座名は、「フィラステイン・ビラーディ」です。